

京都市都心部 パーソントリップ調査分析

1. 分析まとめ

(1) 近畿圏全体の動向

●近畿圏の主要な都心部の共通した動向として、発生集中量＝人の動きが全体に減少しており、全国的な人口減少を背景にこの傾向は今後も進むと推測される

- ・平成 12～22 年度の近畿圏の主要な都心部の発生集中量の推移をみると、全体に減少傾向にある。(p 5 参照)
- ・この背景には、全国的に進む人口減少が考えられ、今後もこの傾向は進むものと思われる。

●来街目的の推移をみると、近畿圏の主要な都心部共通して、「業務」が減少し、「帰宅」「自由」等が増加する傾向にあり、オフィス機能からショッピングや居住等、各都市の都心エリアが担っている都市機能が多様化しているものと推察される

- ・平成 12～22 年度の近畿圏の主要な都心部の集中量（そのエリアを目指した来街）の目的別構成比の推移をみると、いずれのエリアについても、「業務」目的が減少傾向で、「帰宅」「自由」等がやや増えている。(p 9～10 参照)
- ・商用等から、居住やショッピング等、都心部での人々の行動が変化・多様化している様子が推察され、いずれの都市の都心エリアにおいても、オフィス機能から居住機能・商業機能等担っている都市機能が多様化する傾向にあるものと考えられる。

●交通手段をみると、梅北・ミナミ・神戸・天王寺・下京区等、中京区以外の近畿圏の主要な都心部は「鉄道」による来街が中心で、まちの構造が鉄道駅とそれを含む大規模ターミナル施設で構成されていることが現れている

- ・平成 22 年度の集中量における主要な交通手段をみると、梅北、ミナミ等では鉄道駅と商業施設等が一体となったターミナル型のまちが形成されていることもあり、「鉄道」が 70～80%である。(p 12～13 参照)

●梅北・神戸・下京区等、中京区以外の近畿圏の主要な都心部の、「自由」目的で来街する人の「最終到着施設」は、「大規模小売店」が多くの構成比を占める

●「最終到着施設」における商業系施設の構成比は近年減少傾向にあり、中でも「大規模小売店」の減少傾向は小規模小売店や飲食店に比べて著しい傾向にある

- ・梅北・神戸・下京区等、中京区以外の近畿圏の主要な都心部において、「自由」目的で来街する人の「最終到着施設」をみると、「大規模小売店」が 20～40%と高い割合を占めており、大規模小売店が集客の核となった都心エリアが多い。(p 24～25 参照)
- ・しかし、平成 12～22 年の推移をみると「最終到着施設」に占める商業系施設の構成比は、上記のエリアいずれにおいても減少傾向にあり、中でも「大規模小売店」の構成比の減少傾向は、小規模小売店や飲食店に比べて著しい傾向にある。(p 27～28 参照)

(2) 中京区の動向

●近畿圏の主要な都心部の中では、中京区の発生集中量は梅北・ミナミに次ぐ規模

- ・ 平成 22 年度における、中京区の発生集中量を、近畿圏の主要な都心部（下京区、梅北、ミナミ、天王寺、神戸）※と比較すると、中京区は梅北・ミナミに次いで 3 番目（平日）となっており、中京区に次いで下京区となっていることから、京都市の都心部エリアの人の動き（発生集中量）の規模は、梅北・ミナミに次ぐものとなっている。（p 4 参照）

●中京区は、近畿圏の主要な都心部の中でも「京都市民（地元）のまち」

- ・ 平成 22 年度の中京区の流動量における、出発地別の構成比をみると、平日・休日ともに「中京区」が 30～40%、「京都市内」からだ 80%以上にもものぼる。近畿圏の他エリアでは、当該エリアも含む市内からの集客は概ね 50～60%であることから、中京区の特徴として、ほとんどの来街者が「京都市民」であることが捉えられる。（p 2 9 参照）

注）ただし、パーソントリップ調査の対象は、近畿全域（2 府 4 県）の居住者（無作為に抽出した世帯の構成員（5 歳以上）の全員）となるため、近畿圏以外の居住者（近畿圏以外からの観光客等）は含まれないため、中京区を来街する人全てのうち 8 割が必ずしも京都市民とは限らない

●中京区では、他都市に比べて「鉄道」による来街が少なく、バス・徒歩、特に「自転車」が多い

●平日・休日ともに「鉄道」による来街が増加、平日の「自動車」、休日の「徒歩」が減少傾向

- ・ 近畿圏の他の都心部エリアにおける来街時の交通手段は「鉄道」が 70%程度であるのに対し、中京区では 30%以下と低く、バス・自転車・徒歩等他の交通手段による来街が多い。特に「自転車」については近畿圏の他エリアに比べて高い構成比となっている。（p 1 1～1 3 参照）
- ・ また、中京区の集中量の平成 12～22 年度の交通手段別構成比の推移をみると、平日・休日ともに「鉄道」の構成比が増加している。「自転車」についても平日・休日ともにやや増加している。なお、平日において「自動車」が減り、休日においては「徒歩」が減少している。（p 1 3 参照）
- ・ 来街目的別に交通手段の推移をみると、上記の傾向は、いずれの目的においてもみられるため、来街目的に関わらず、公共交通の利用がやや増えているものと推察される。（p 1 4 参照）

●発生集中量の目的別構成比の推移をみると、平日・休日ともに「業務」が若干減少しており、働くまちから、住むまち・訪れるまちへの変化が近畿圏全体と同様、中京区でも見られる

- ・ 発生集中量の平成 12～22 年度の目的別構成比の推移をみると、平日・休日ともに「出勤」、「自由」、「帰宅」の構成比がやや増加し、「業務」の構成比が減少傾向にある。（p 8～1 0 参照）
- ・ 近畿圏全体の動向と同じく、中京区でも「働くまち」としての機能が減少し、「住むまち」「訪れるまち」等、都市機能の多様化が進む傾向がみられる。

●他エリアが大規模小売店を中心に集客している中、「小規模小売店」を目指して訪れる人が多く、
多様な施設を目指して多様な年代の人々が訪れているのが中京区の特徴

- ・ 平成 22 年度の集中量における到着施設をみると、近畿圏の他エリアが「大規模小売店」を中心に集客している中、中京区では「小規模小売店」やその他の多様な施設を目指して来る人が多い。(p 23～25 参照) また、来街者の年代も均等の傾向があり、(p 17～22 参照) 多様な目的で多様な年代の人が訪れているのが特徴と言える。

●平日・休日ともに「自由」目的における「商業系施設（小規模・大規模小売店・飲食店）」を目指した来街は減少傾向と近畿圏全体と同様の傾向だが、中京区では休日の「小規模小売店」「飲食店」は横ばいで推移と健闘

- ・ 平成 12～22 年度における、目的別・最終到着施設別の中京区の集中量の推移をみると、「自由」目的における「小規模小売店」、「大規模小売店」、「飲食店」の構成比が減少と、商業系施設の全ての構成比が減少している。この傾向は、近畿圏全体と同様だが、休日における小規模小売店と飲食店の構成比の減少はほとんどみられないことが特徴となっている。(p 26～28 参照)

1. 分析結果

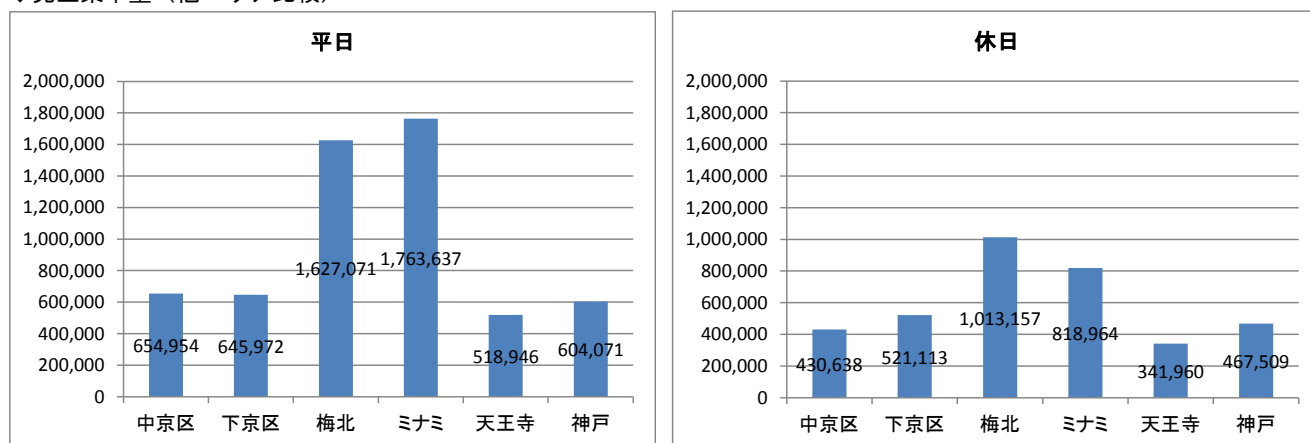
(1) 発生集中量

①発生集中量

- 近畿圏の主要な都心部と比較すると、中京区は梅北・ミナミに次ぐ規模
- 平成 12～22 年度の中京区の発生集中量は減少傾向にある

- ・平成 22 年度における、中京区の発生集中量を、近畿圏の主要な都心部（下京区、梅北、ミナミ、天王寺、神戸）※と比較すると、平日では下京区、神戸、天王寺を上回っているものの、休日では下京区を下回っている。
- ・下京区には、京都駅周辺に加え、京都市都心部の主要な百貨店が含まれることから、近畿圏の主要な都心部の中での京都市都心部の集客量は、梅北・ミナミに次ぐ地位と推察される。

◆発生集中量（他エリア比較）

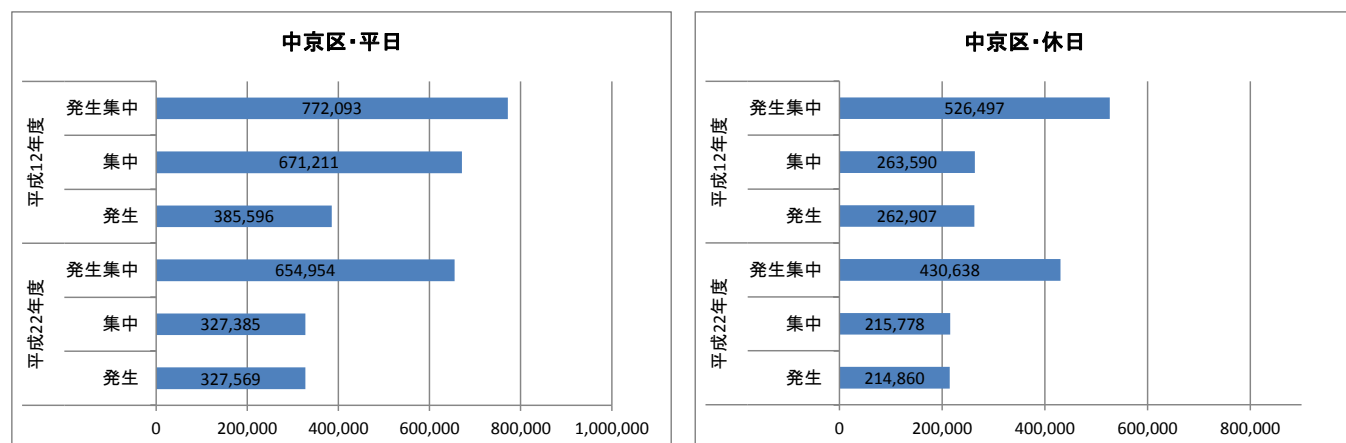


※「梅北」は、平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査の小ゾーン別集計のうち、大阪市北区不明、大阪市北区（旧北区西部）、大阪市北区（旧北区東部）、北区（旧大淀区）の和、「ミナミ」は、大阪市中央区（不明）、大阪市中央区（旧東区）、大阪市中央区（旧南区）の和、「神戸」は神戸市中央区生田内陸部、神戸市中央区生田臨海部の和を用いている。

（平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査）

- ・平成 12 年度から平成 22 年度にかけての中京区の発生集中量の推移をみると、平日・休日ともに発生集中量は減少している。

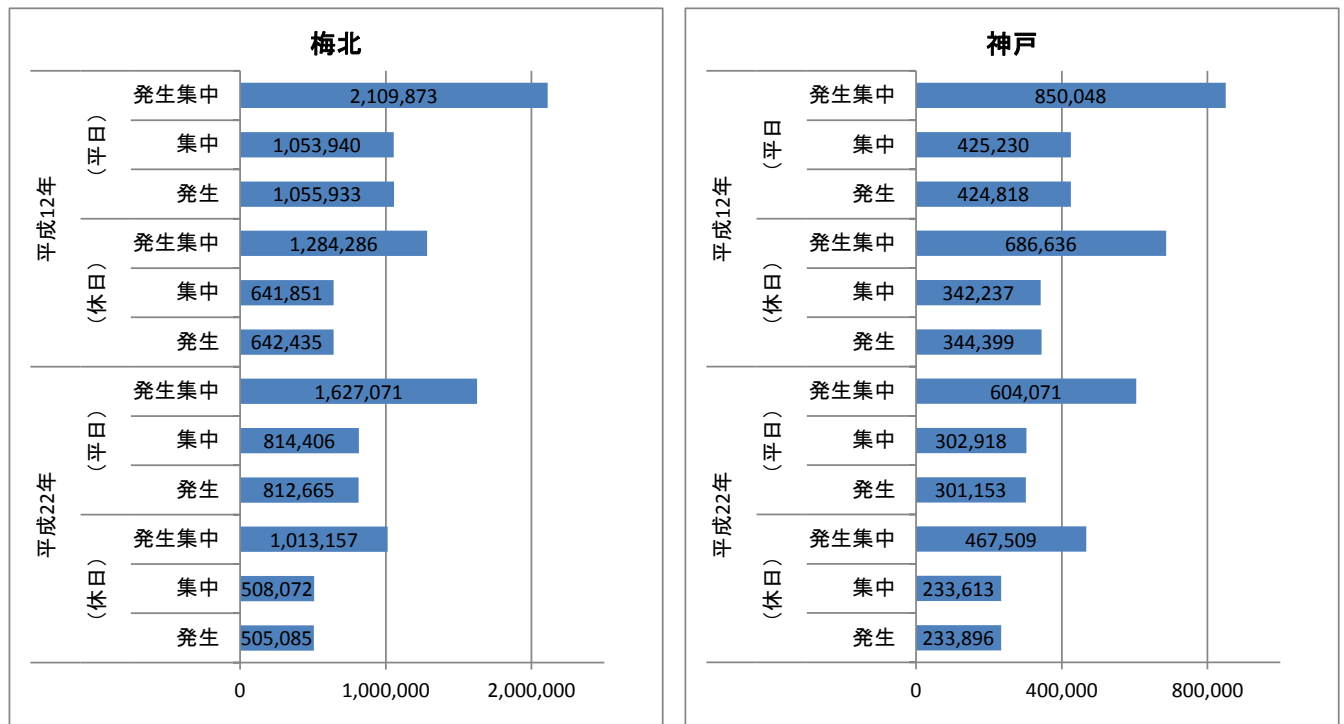
◆発生集中量（平成 12～22 年度推移）



- 近畿圏の主要な都心部と比較すると、梅北・神戸いずれのでも発生集中量は減少傾向
- 発生集中量の減少は全国的な動向

- ・平成12年度から平成22年度にかけての発生集中量の推移を中京区、梅北、神戸とで比較すると、いずれにおいても平日・休日ともに減少しており、全国的な人口減少を背景に、発生集中量が宿所している傾向が確認できる。

◆発生集中量（平成12～22年度推移 他エリア比較）



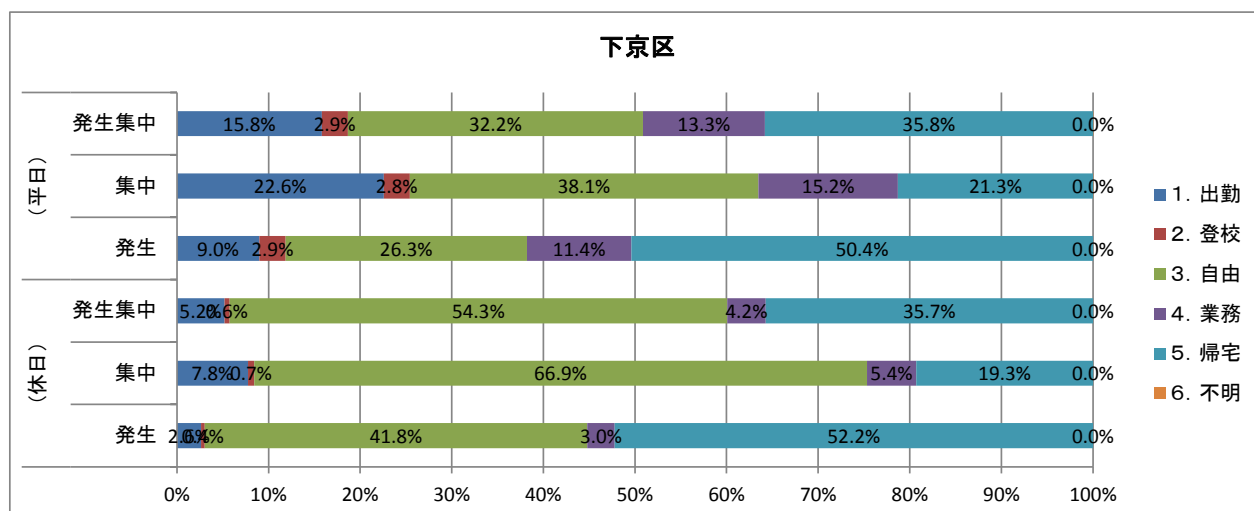
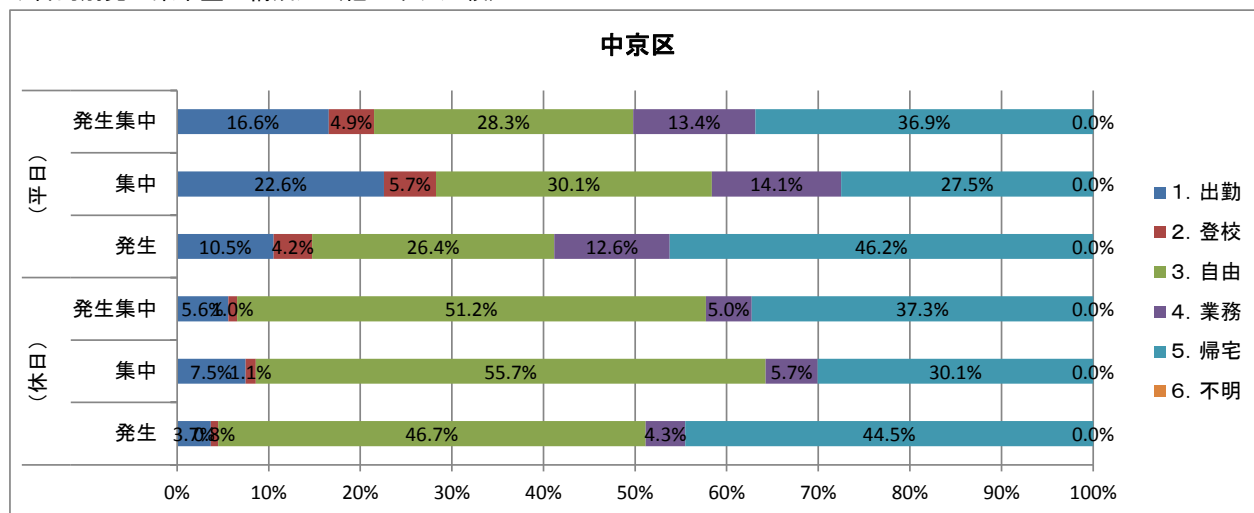
(平成12年度、平成22年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

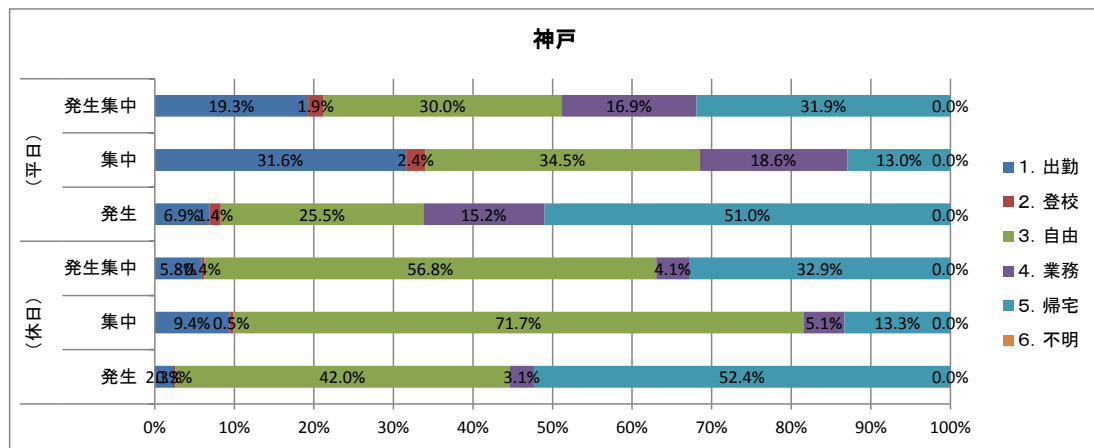
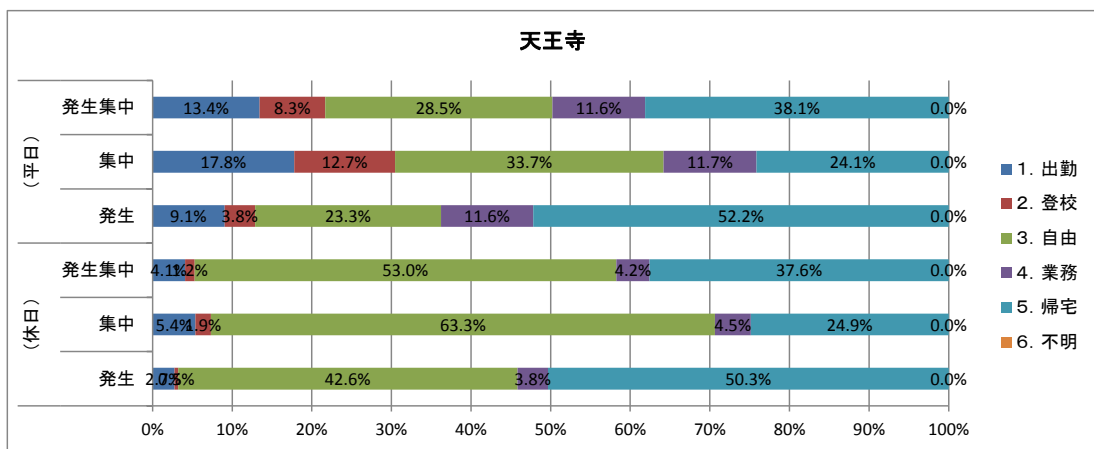
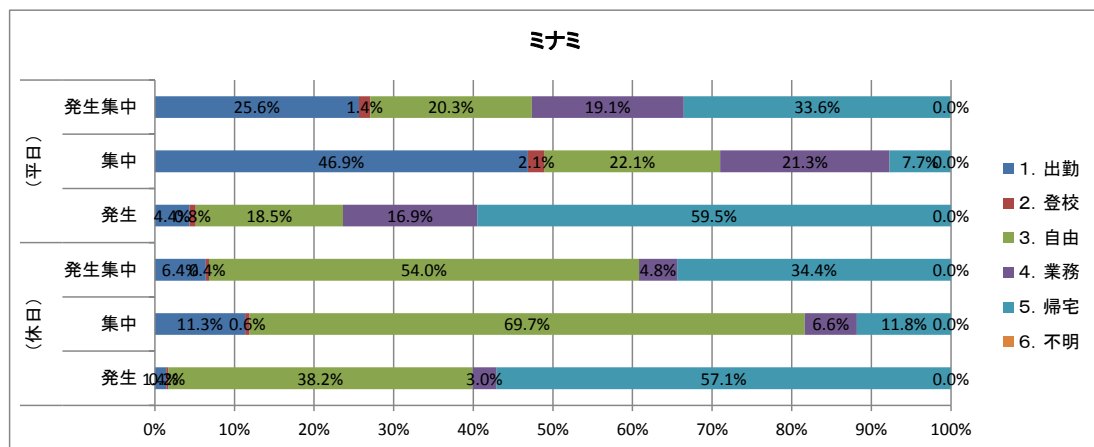
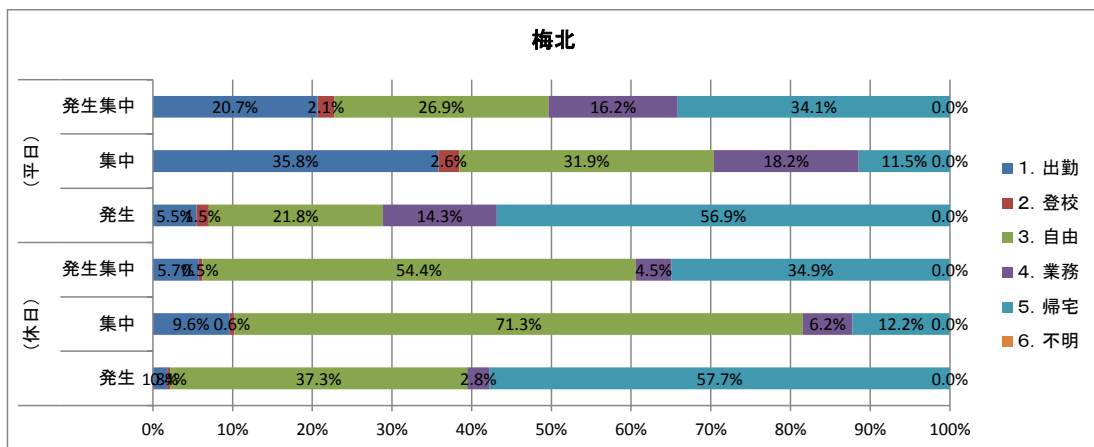
②目的別発生集中量

- 目的別の発生集中量は、平日では「帰宅」、休日では「自由」が高い
- 近畿圏の主要な都心部と比較すると、平日・休日ともに「帰宅」が高く、エリア内に住む人が多いという特色が現れている

- ・目的別に中京区の発生集中量の構成比をみると、平日では「帰宅」が、休日では「自由」が他の項目に比べてポイントが高くなっている。
- ・また、目的別の発生集中量の構成比を他エリアと比較すると、平日・休日ともに「帰宅」の構成比が他の項目に比べてやや高い傾向があり、他エリアと比べてエリア内に住む人が多いことが推察される。

◆目的別発生集中量の構成比（他エリア比較）



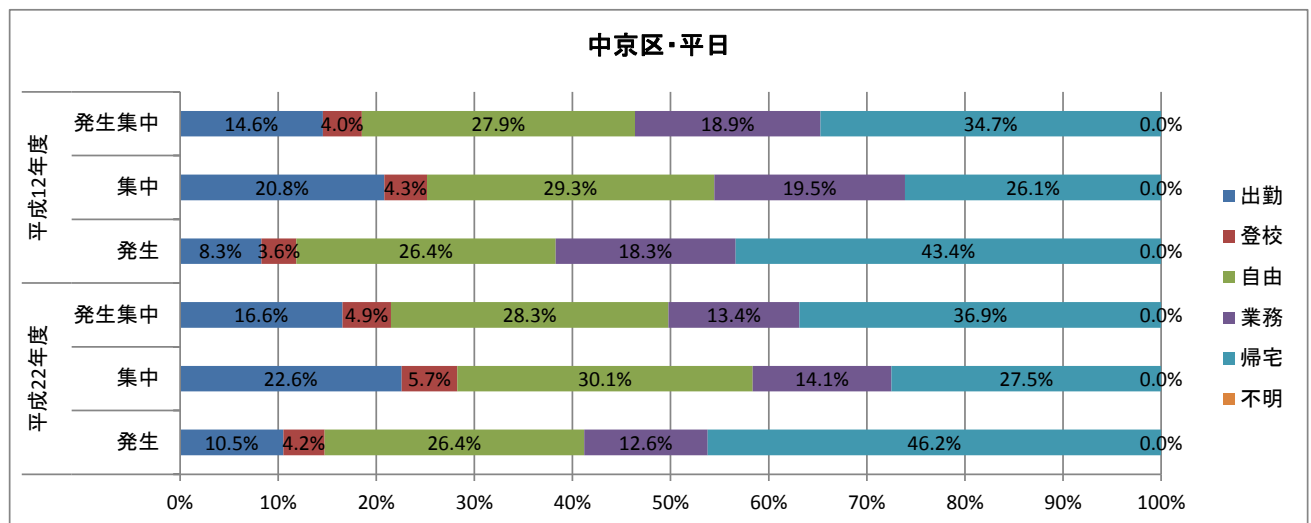
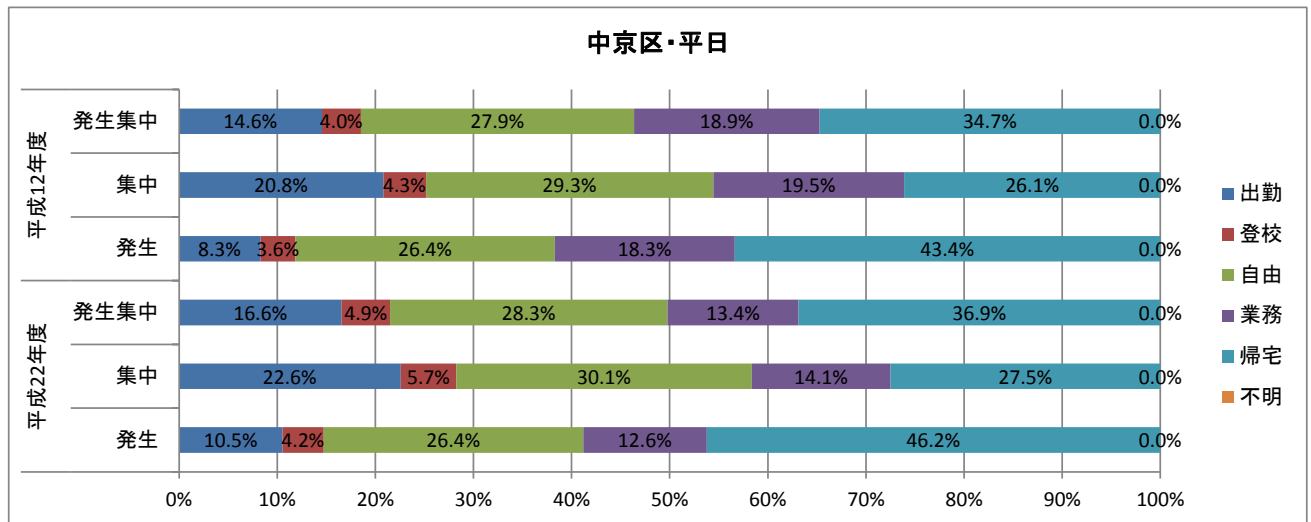


(平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

●発生集中量の目的別構成比の推移をみると、平日・休日ともに「業務」が若干減少しており、働くまちから、住むまち・訪れるまちへの変化が推察される

- ・ 中京区の発生集中量の目的別構成比の、平成 12 年度から平成 22 年度の推移をみると、平日・休日ともに「出勤」、「自由」、「帰宅」の構成比がやや増加し、「業務」の構成比が減少傾向にある。

◆目的別発生集中量の構成比（平成 12～22 年度推移）

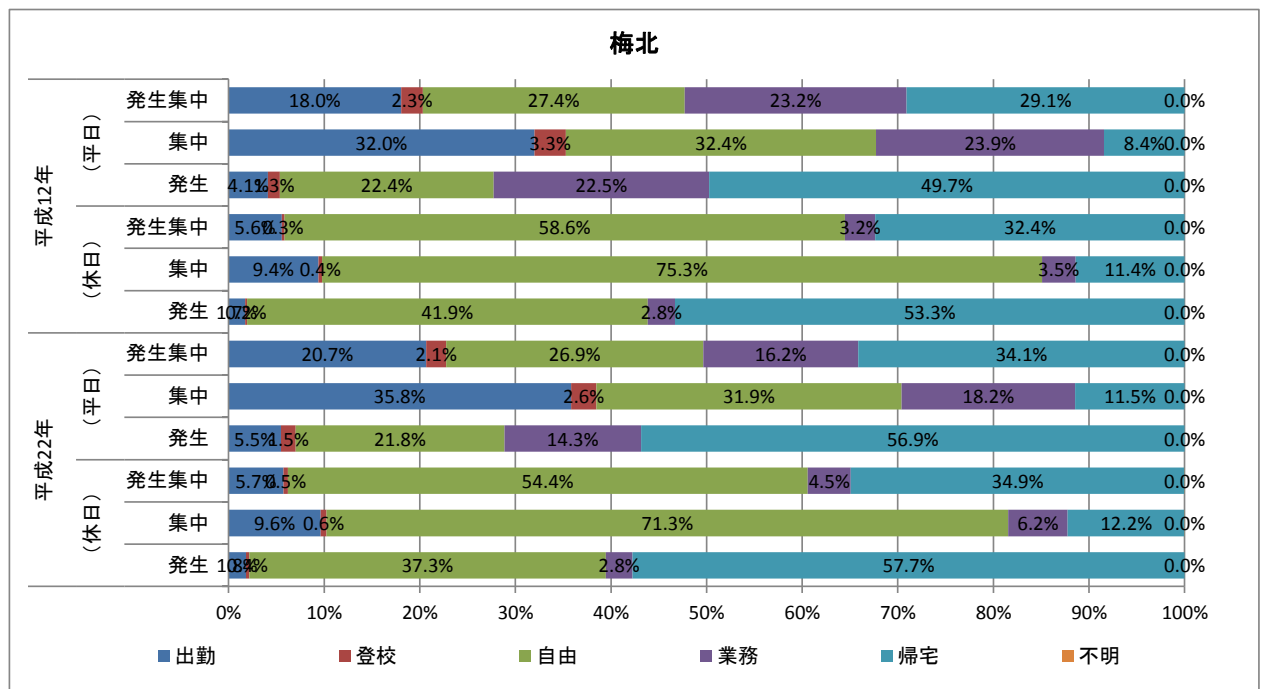
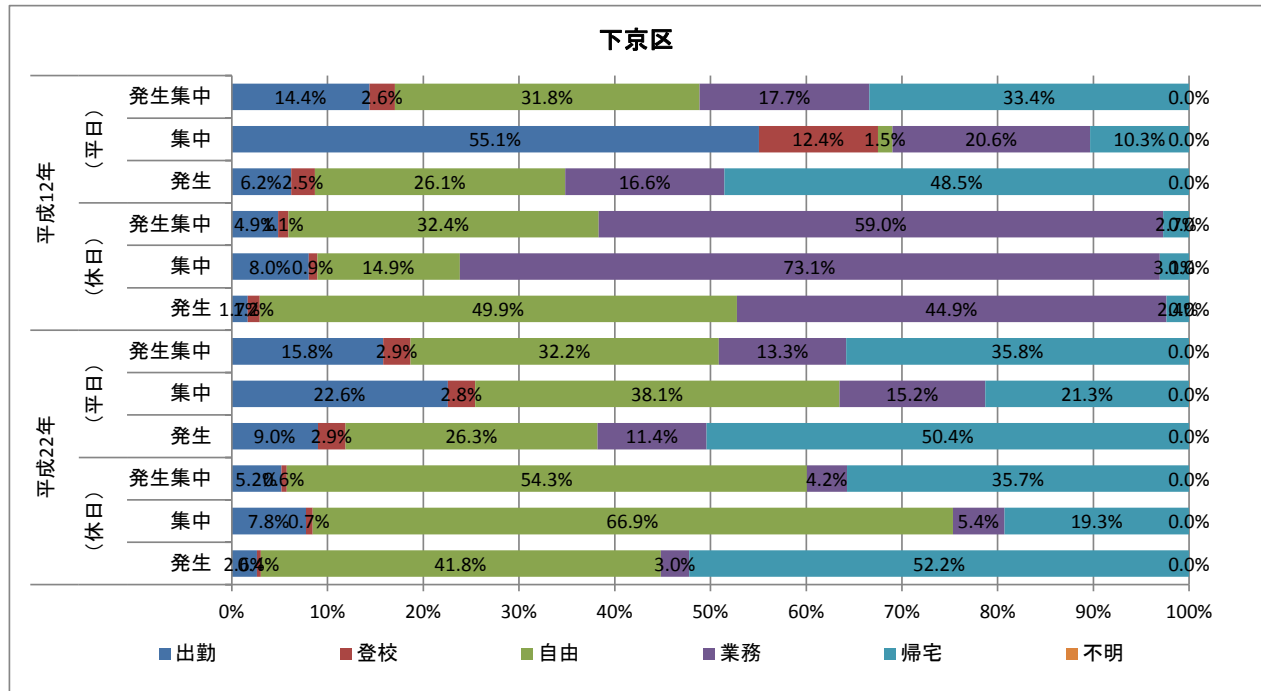


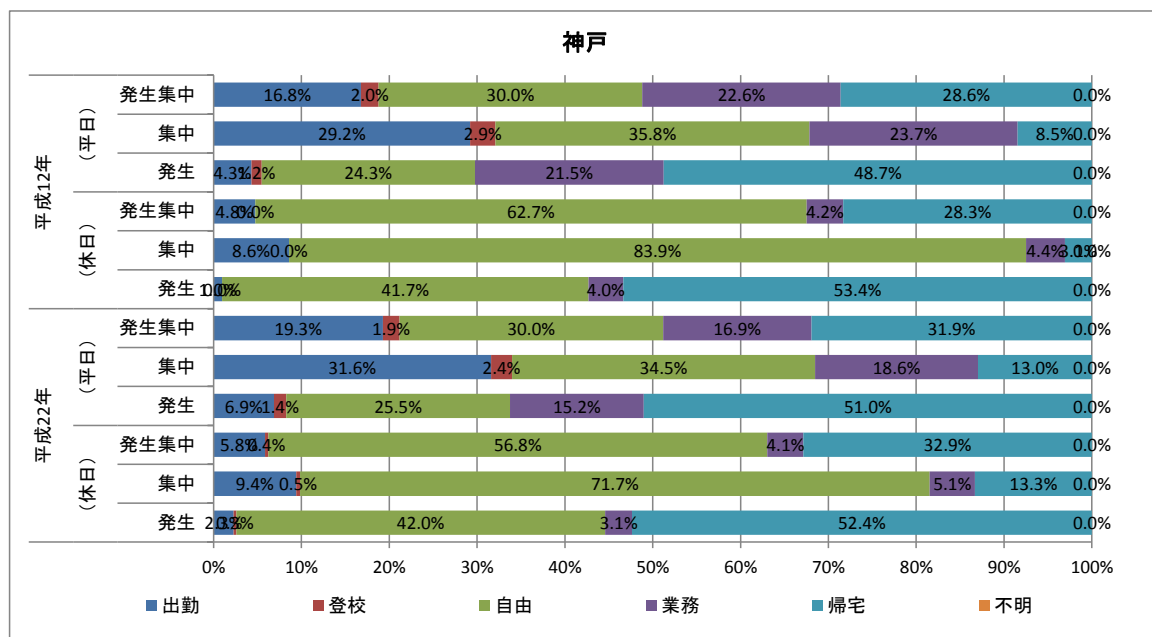
（平成 12 年度、平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査）

●発生集中量の目的別構成比の推移を梅北・神戸と比較すると、中京区と同様「業務」が減少傾向にあり、特に神戸の休日においてその傾向が著しい

- ・発生集中量の目的別構成比の、平成12年度から平成22年度の推移を梅北・神戸と比較すると、中京区と同様「業務」の構成比が減少傾向にあり、特に神戸ではその傾向が著しい。

◆目的別発生集中量の構成比（平成12～22年度推移）





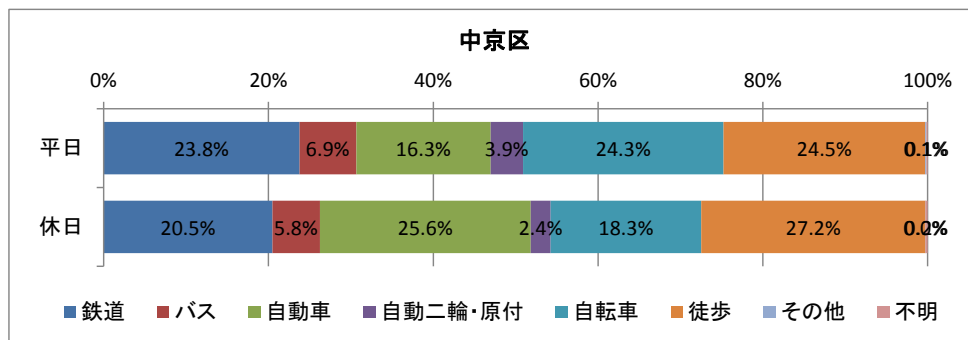
(平成 12 年度、平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

③主要な交通手段別集中量

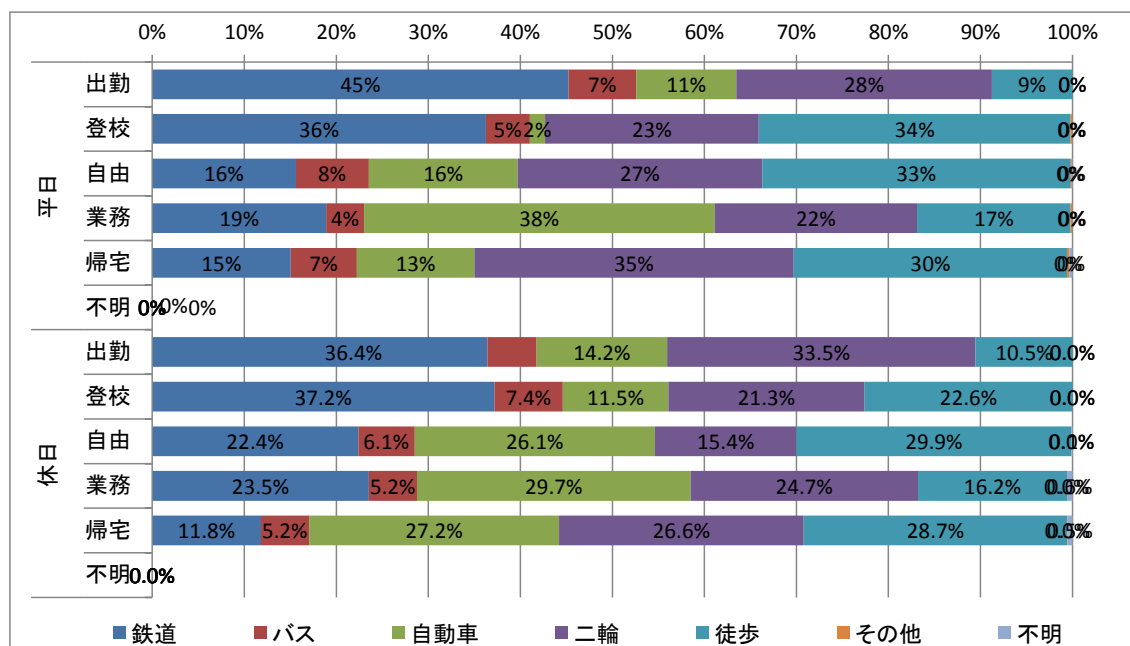
- 平日では「徒歩」「自転車」「鉄道」による来街が多い
- 休日では「鉄道」「バス」の公共交通機関と「自転車」の構成比が平日より減り、「自動車」「徒歩」が増加する傾向がある。

- ・中京区の集中量の主要な交通手段別構成比をみると、平日では「徒歩」「自転車」「鉄道」による来街が多く、休日では平日に比べて「鉄道」「バス」といった公共交通機関と「自転車」の構成比が減り、「自動車」「徒歩」が増加している。
- ・また、集中量の目的別に主要な交通手段別構成比をみると、平日・休日ともに「出勤」「登校」で「鉄道」「バス」といった公共交通機関の利用が他の目的に比べて多く、「自由」「帰宅」で「徒歩」が多くなっている。
- ・休日では、平日に比べて「自由」「業務」での「鉄道」「バス」の利用が増えている。

◆交通手段別集中量の構成比

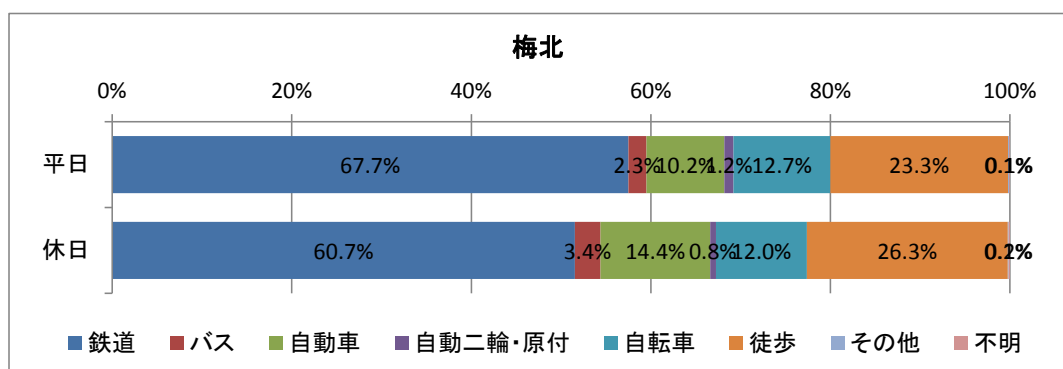
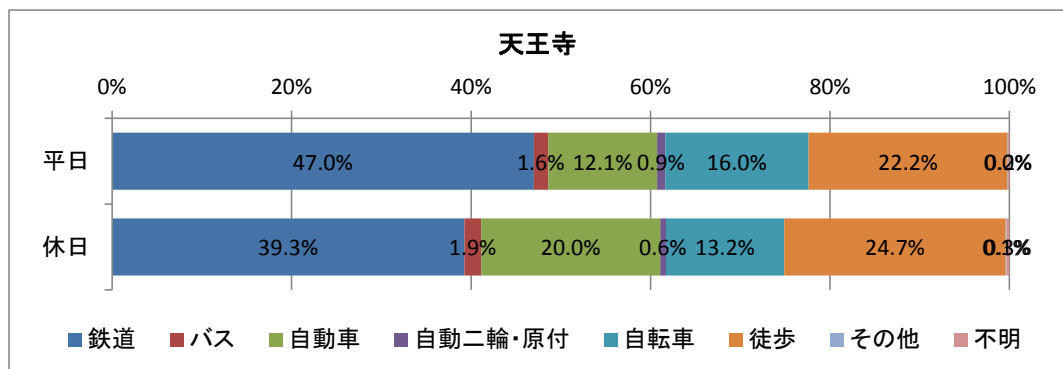
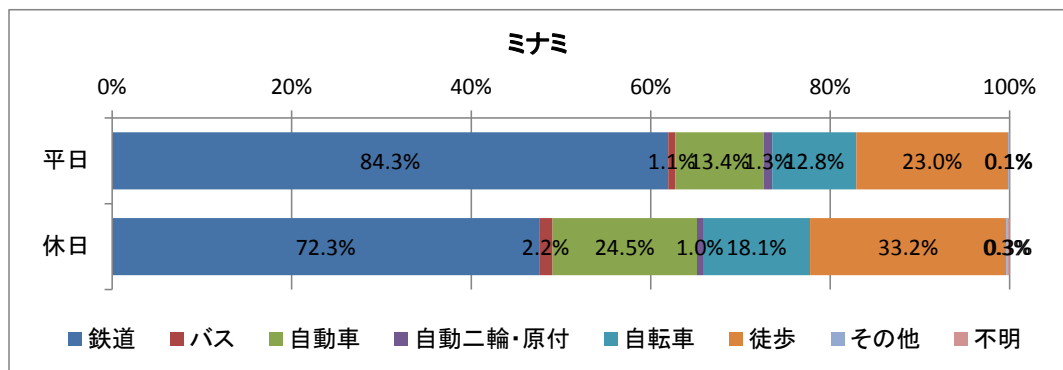
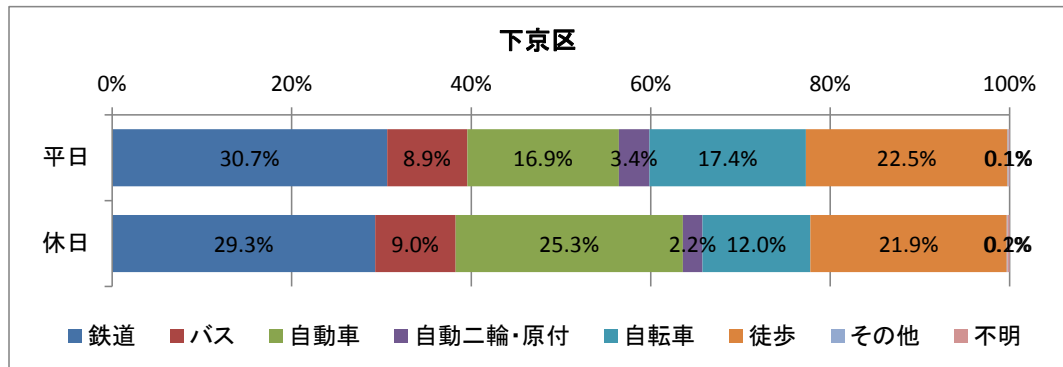


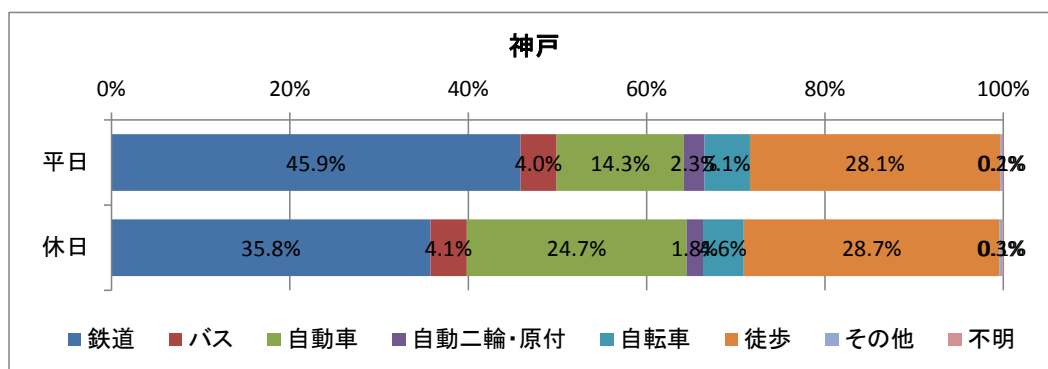
◆目的別交通手段別集中量の構成比



●近畿圏の主要な都心部と比較すると、「鉄道」以外、特に「バス」「自転車」「徒歩」による来街が平日・休日ともに多い

- ・ 他エリアと比較すると、平日・休日ともに「鉄道」以外、特に「バス」「自転車」「徒歩」による来街が平日・休日ともに多い。
- ・ ◆交通手段別集中量の構成比（他エリア比較）



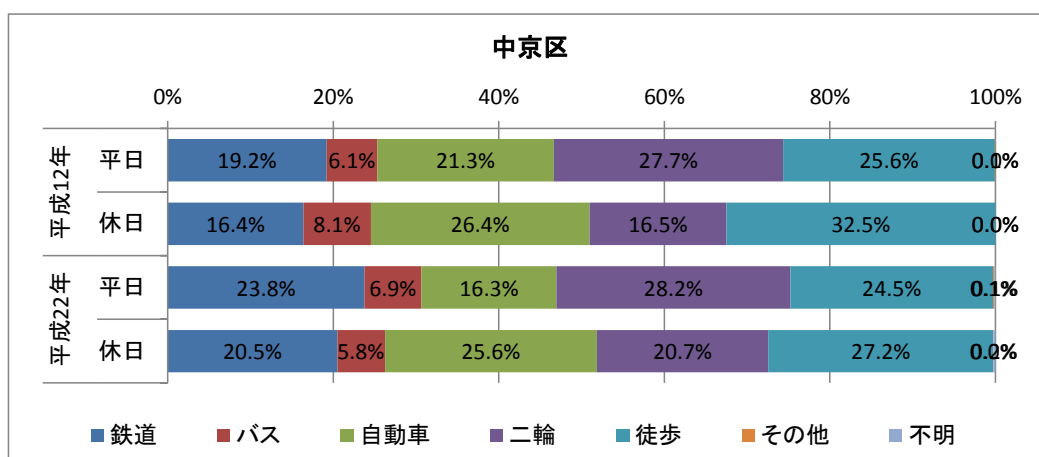


(平成 12 年度、平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

●平日・休日ともに「鉄道」による来街が増加、平日の「自動車」、休日の「徒歩」が減少傾向

- ・ 中京区の集中量の主要な交通手段別の構成比の、平成 12 年度から平成 22 年度の推移をみると、平日・休日ともに「鉄道」の構成比が増加している。
- ・ また、平日において「自動車」が減り、休日においては「徒歩」が減少し、「自転車」が増加している。

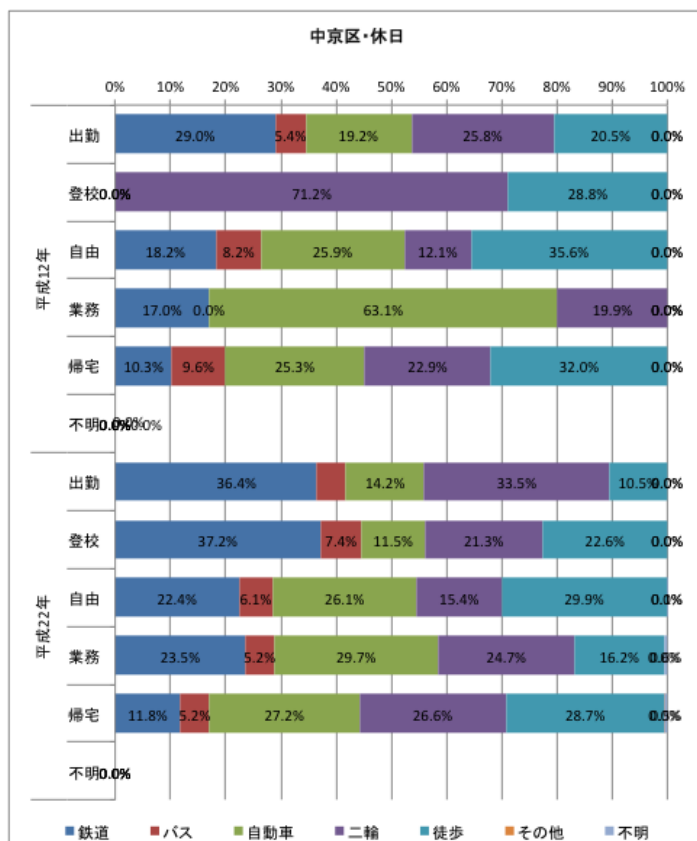
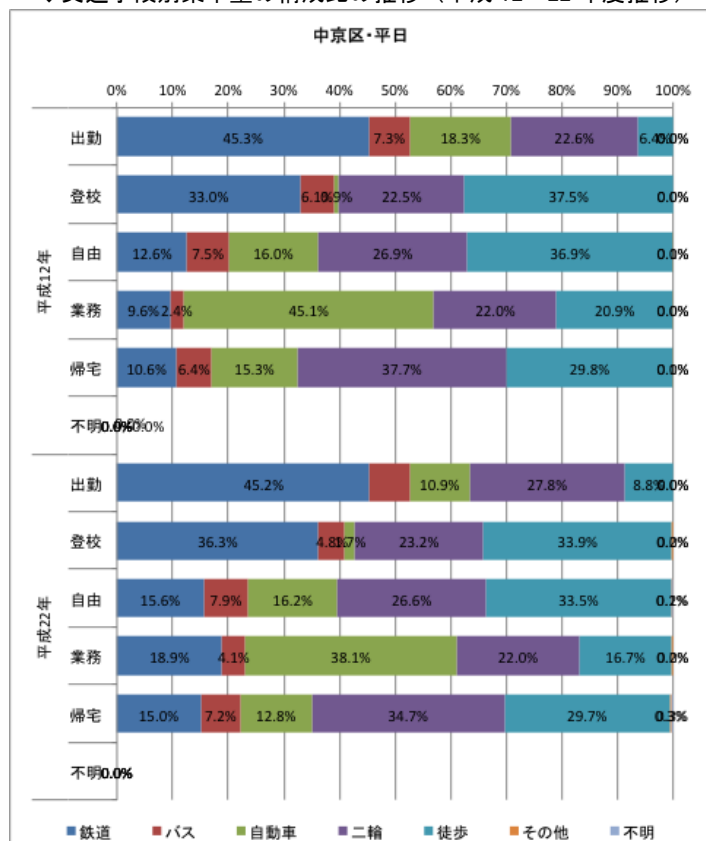
◆交通手段別集中量の構成比の推移（平成 12～22 年度推移）



●目的別にみても、平日・休日ともに「鉄道」による来街が増加、平日の「自動車」、休日の「徒歩」が減少傾向にある全体の動向に大きな違いは見られない

- ・ 中京区の集中量の主要な交通手段別の構成比の、平成 12 年度から平成 22 年度の推移を目的別にみると、平日・休日ともに「鉄道」の構成比が増加、平日において「自動車」が減り、休日においては「徒歩」が減少し、「自転車」が増加といった全体の動向と、各来街目的での動向とに違いは見られない。

◆交通手段別集中量の構成比の推移（平成 12～22 年度推移）

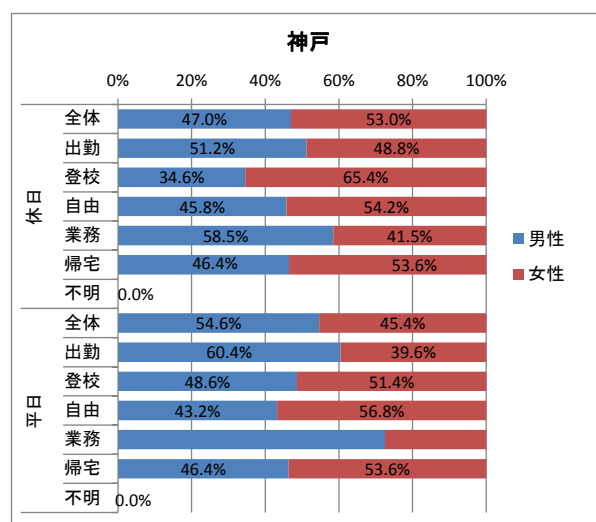
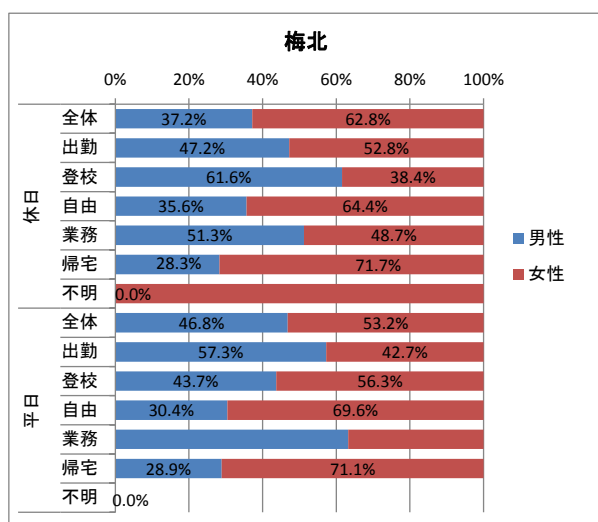
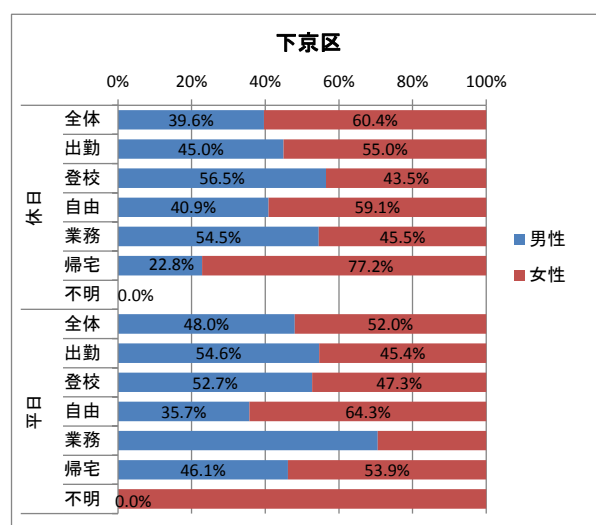
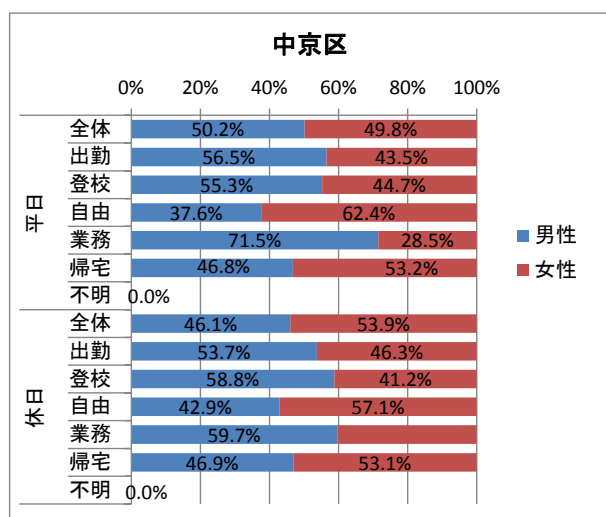


④目的別・性別・年齢階層別集中量

- 集中量の目的別性別構成比をみると、「業務」では男性、「自由」では女性の構成比が高い
- 中京区は、近畿圏の他エリアに比べ、上記の傾向がより顕著である

- ・平成 22 年度における中京区の集中量の、目的別・性別の構成比をみると、「業務」では男性の構成比が女性より高く、「自由」では女性の構成比が男性よりも高くなっている。
- ・また、平日では「業務」の男性の構成比が休日よりも高くなっている。
- ・平成 22 年度における、目的別・性別の中京区の集中量を、他エリアと比較すると、平日における「業務」の男性の構成比が他エリアよりも高い。また、平日における「自由」の女性の構成比も「梅北」に次いで高い。

◆目的別・性別集中量の構成比（他エリア比較）

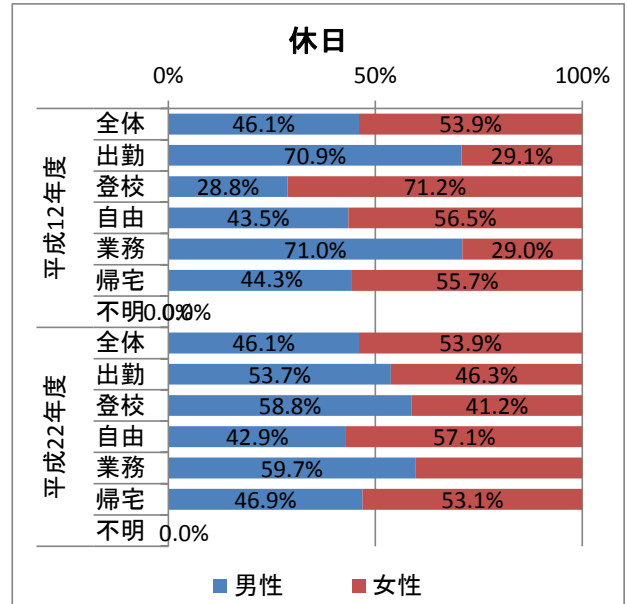
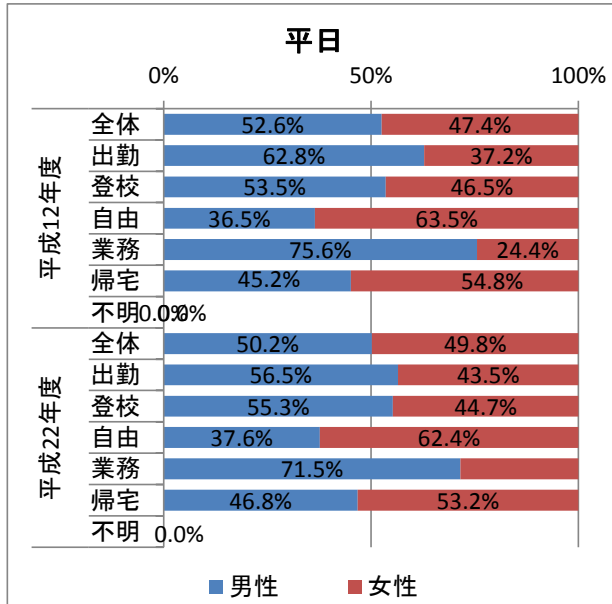


(平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

● 集中量の目的別性別構成比の推移をみると、平日・休日ともに大きな男女比の変化は見られない

- ・ 平成 12～22 年度における中京区の集中量の、目的別・性別の構成比の推移をみると、平日・休日ともに全体の男女比は大きな変化はない。
- ・ 目的別には、平日・休日の「登校」における男性の構成比が増加、休日の「業務」における女性の構成比が増加している他は、大きな変化はみられまい。

◆ 目的別・性別集中量の構成比（平成 12～22 年度推移）

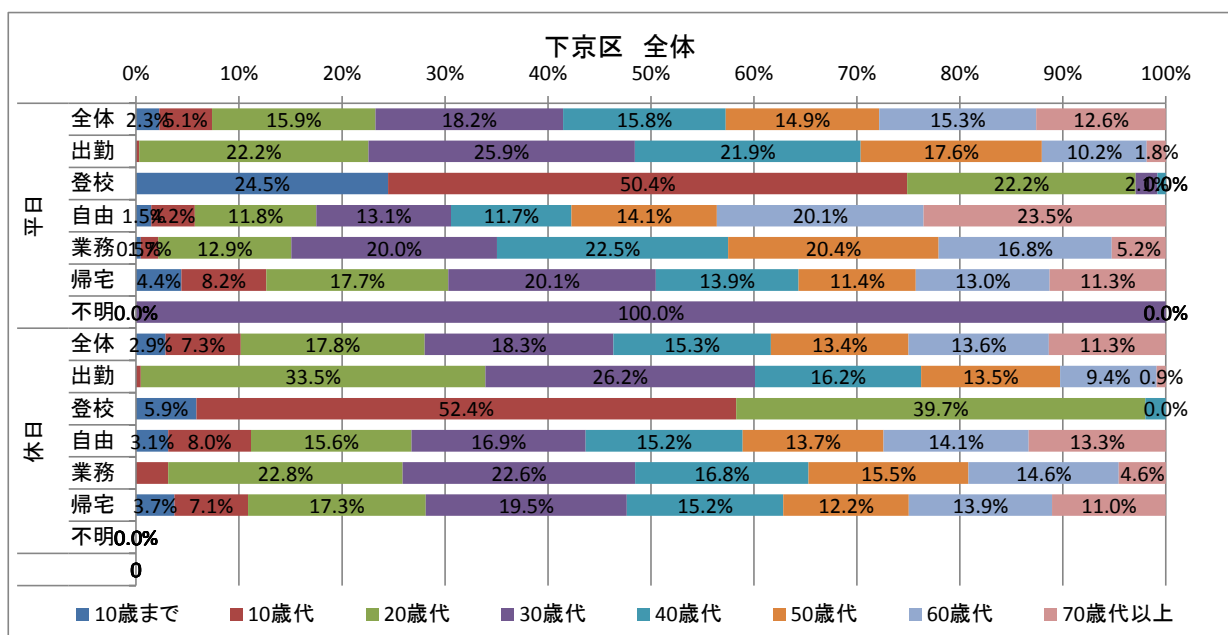
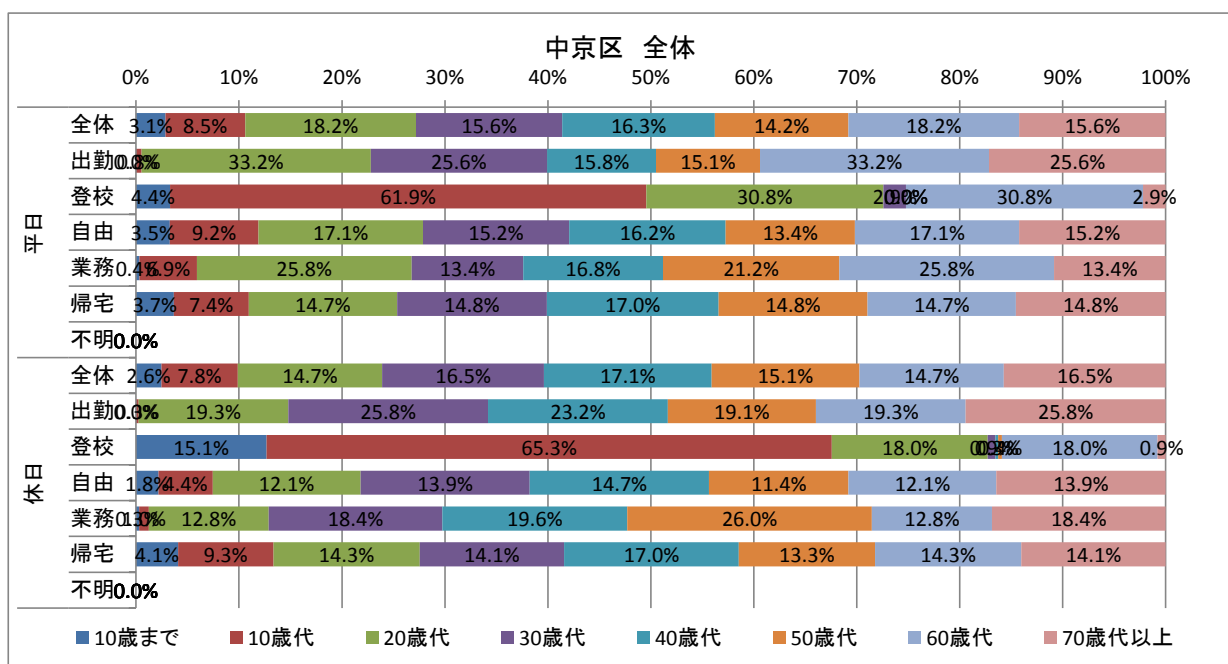


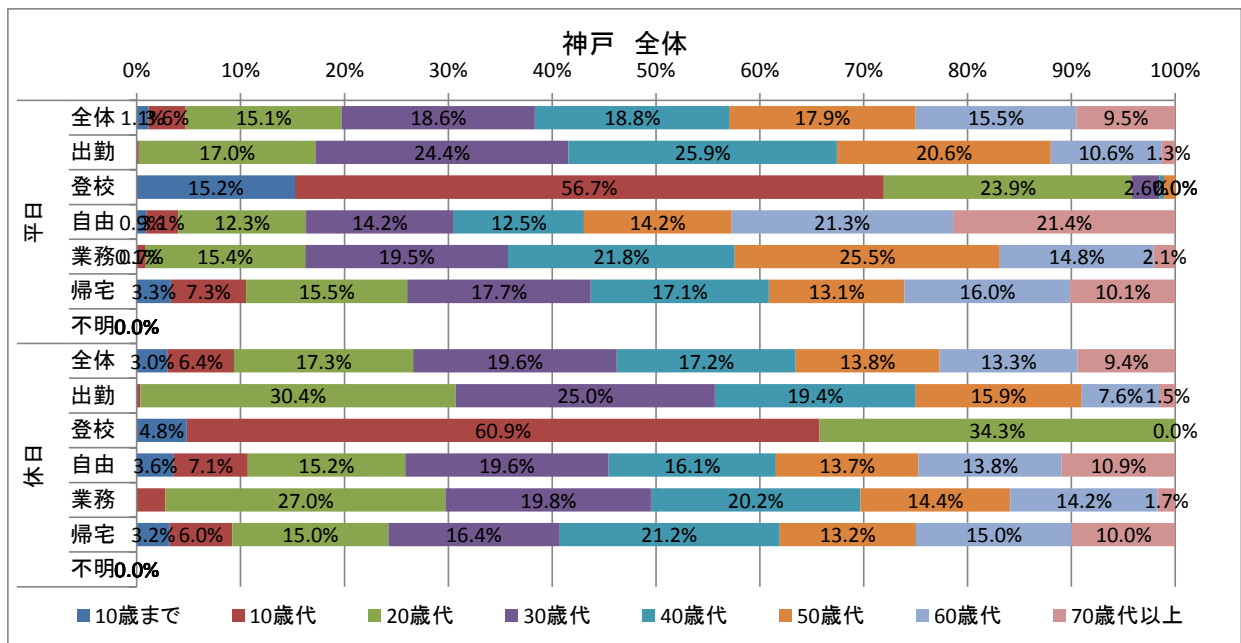
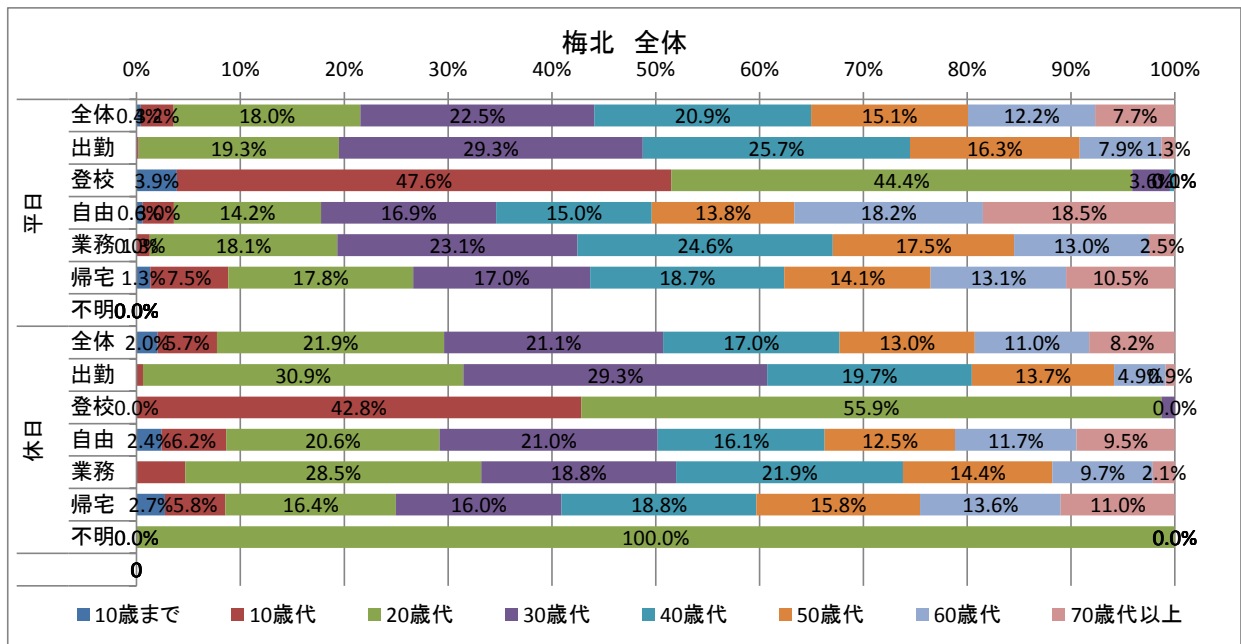
(平成 12 年度、平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

- 各目的、全ての年代が同等の構成比の傾向があり、多世代が訪れるまちであることが推察される
- 近畿圏の他エリアと比べると、平日の「業務」「自由」における 20 歳代の構成比が高く、若者（学生）のまちとしての特性が現れていると推察される

- ・平成 22 年度における中京区の集中量の、目的別・年齢別の構成比をみると、「登校」で 10 歳代が 6 割以上を占める以外は、いずれの目的においても 20 歳代以上は大きくは構成比が変わらない結果となっており、特定の世代に偏ることなく、多世代が訪れているまちであることが推察される。
- ・平成 22 年度における、目的別・年齢階層別の中京区の集中量を、他エリアと比較すると、平日の「業務」における 20 歳代及び 60～70 歳代の構成比が高い。また、平日の「自由」における 20 歳代の構成比が他のエリアよりもやや高い傾向だが、休日になると他のエリアに比べ少なくなっている。

◆目的別・年齢階層別集中量の構成比（他エリア比較）



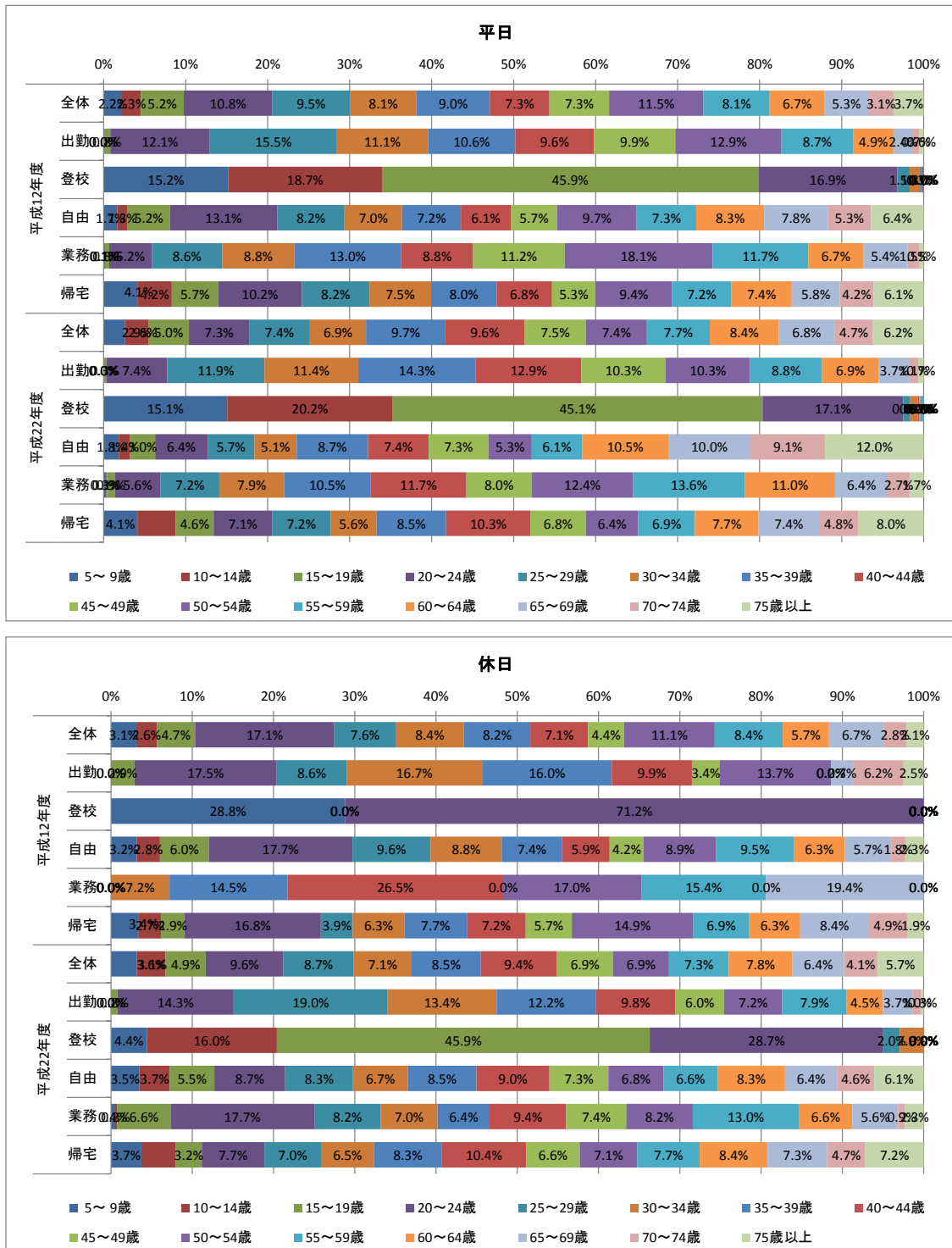


(平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

●休日で 20 代前半の「自由」、40 代前半の「業務」が減少し、全世代が訪れるまちへと変化

- ・ 平成 12～平成 22 年度における、目的別・年齢階層別の中京区の集中量の推移をみると、平日の「自由」における 60 歳代以上、「業務」の 55～64 歳、「帰宅」の 40 歳代の構成比がやや増加している。
- ・ また、休日では「自由」における 20～24 歳、「業務」における 40～44 歳代が減少し、全体に全世代が均等に訪れるまちへと変化している。

◆目的別・年齢階層別集中量の構成比（平成 12～22 年度推移）

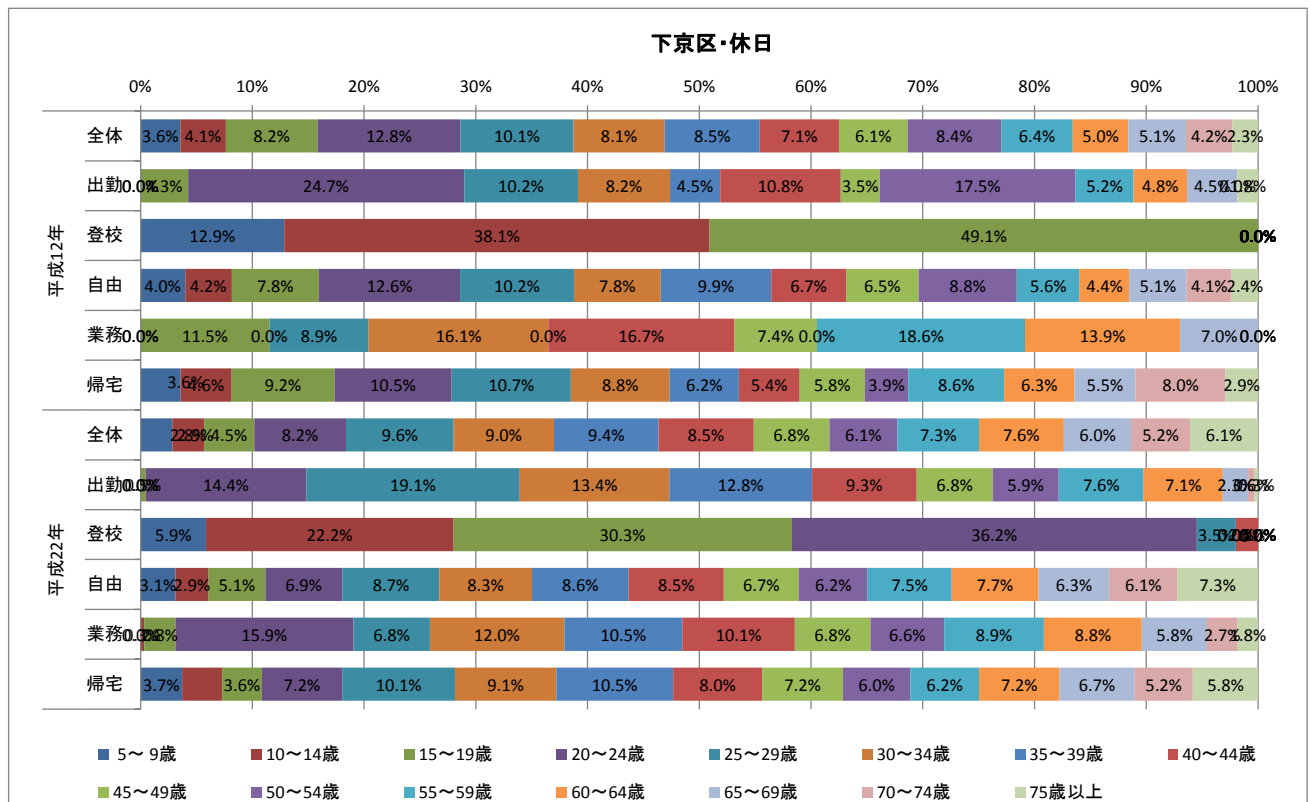
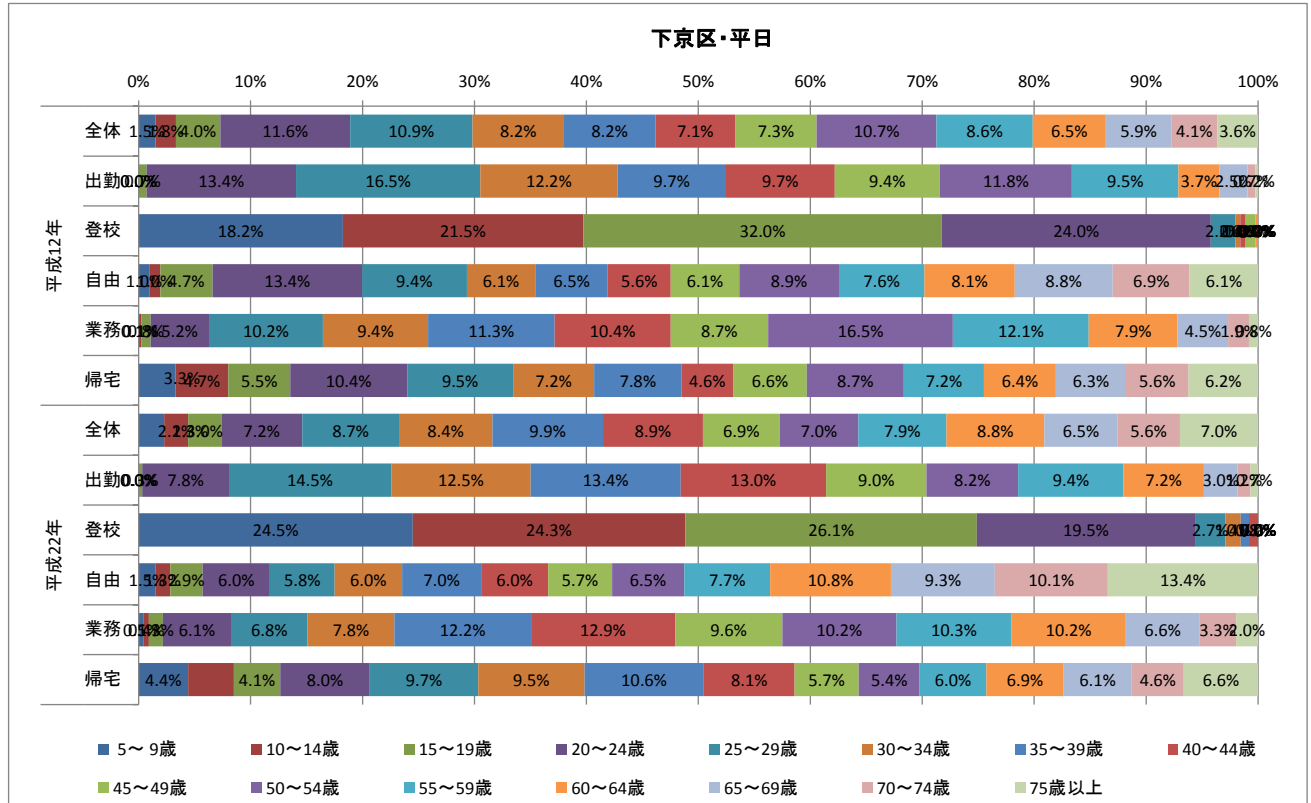


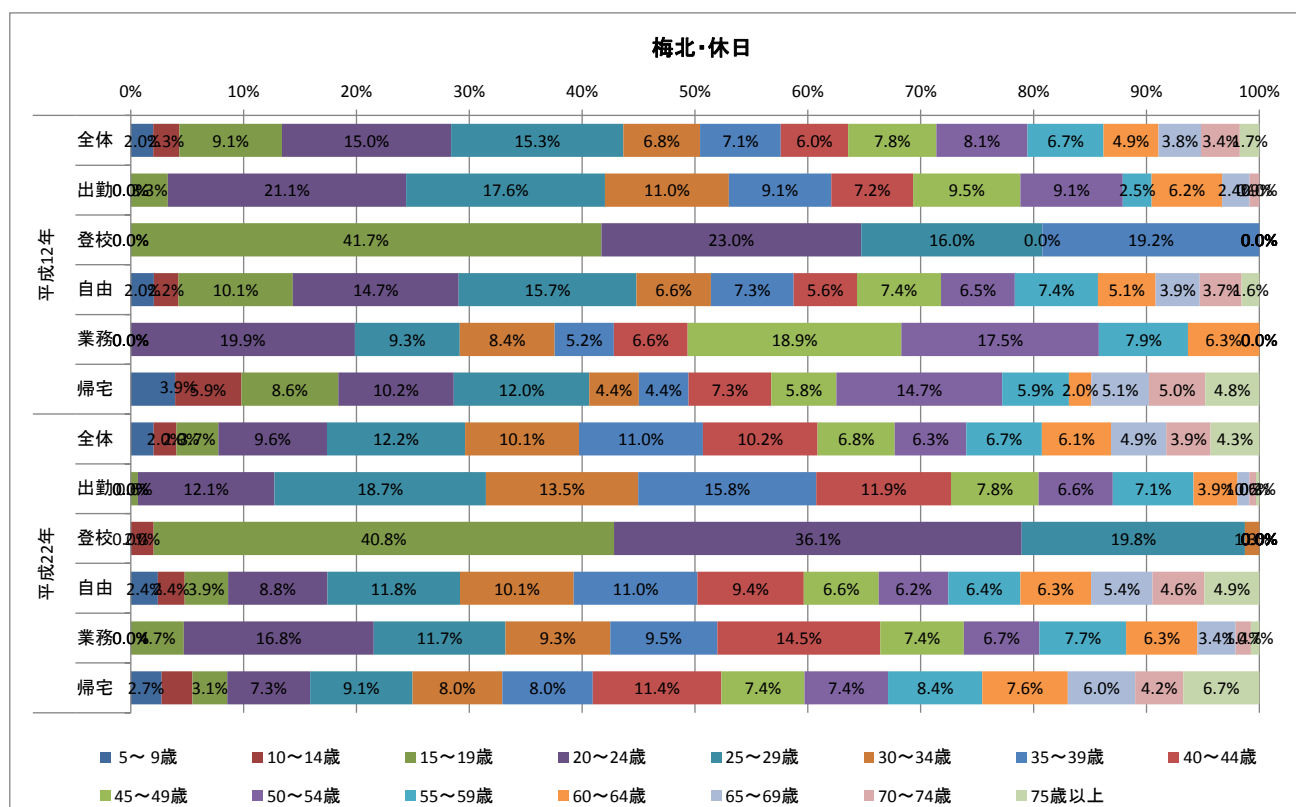
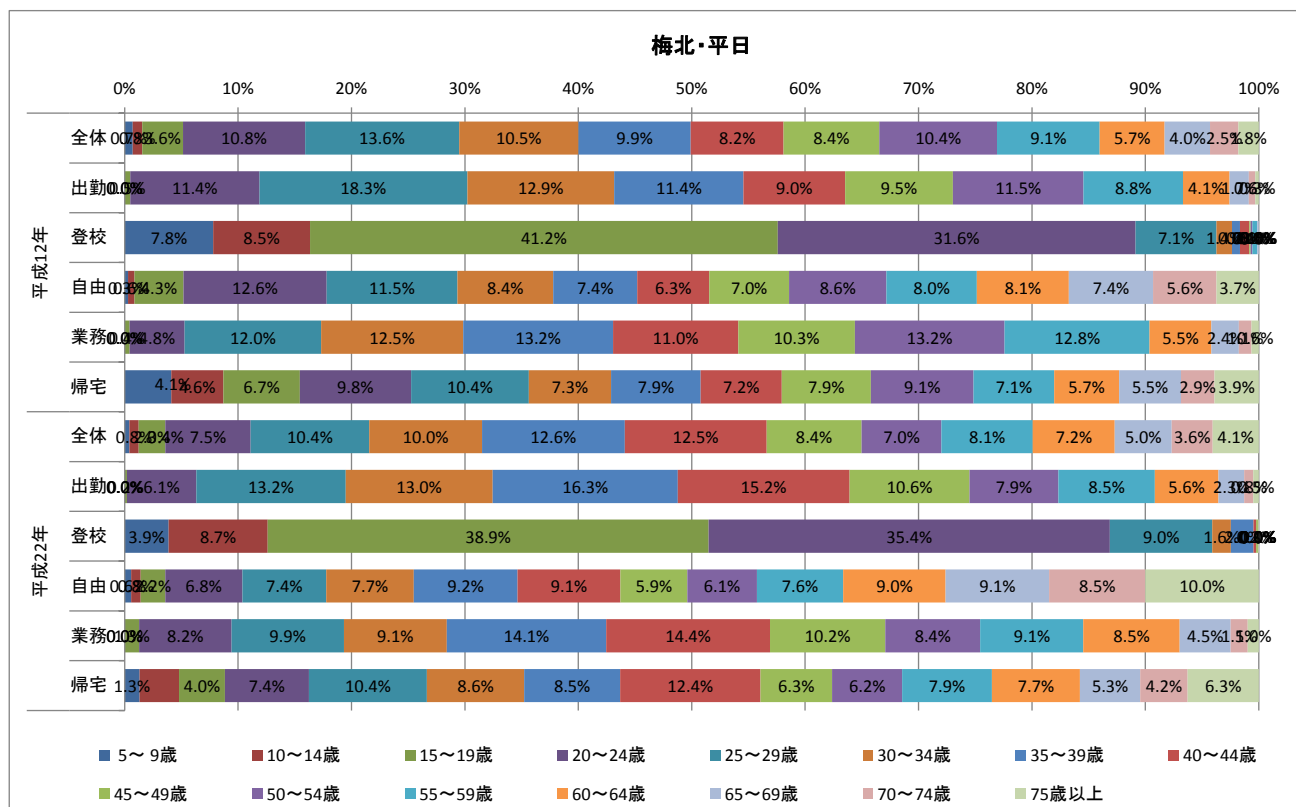
(平成 12～22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

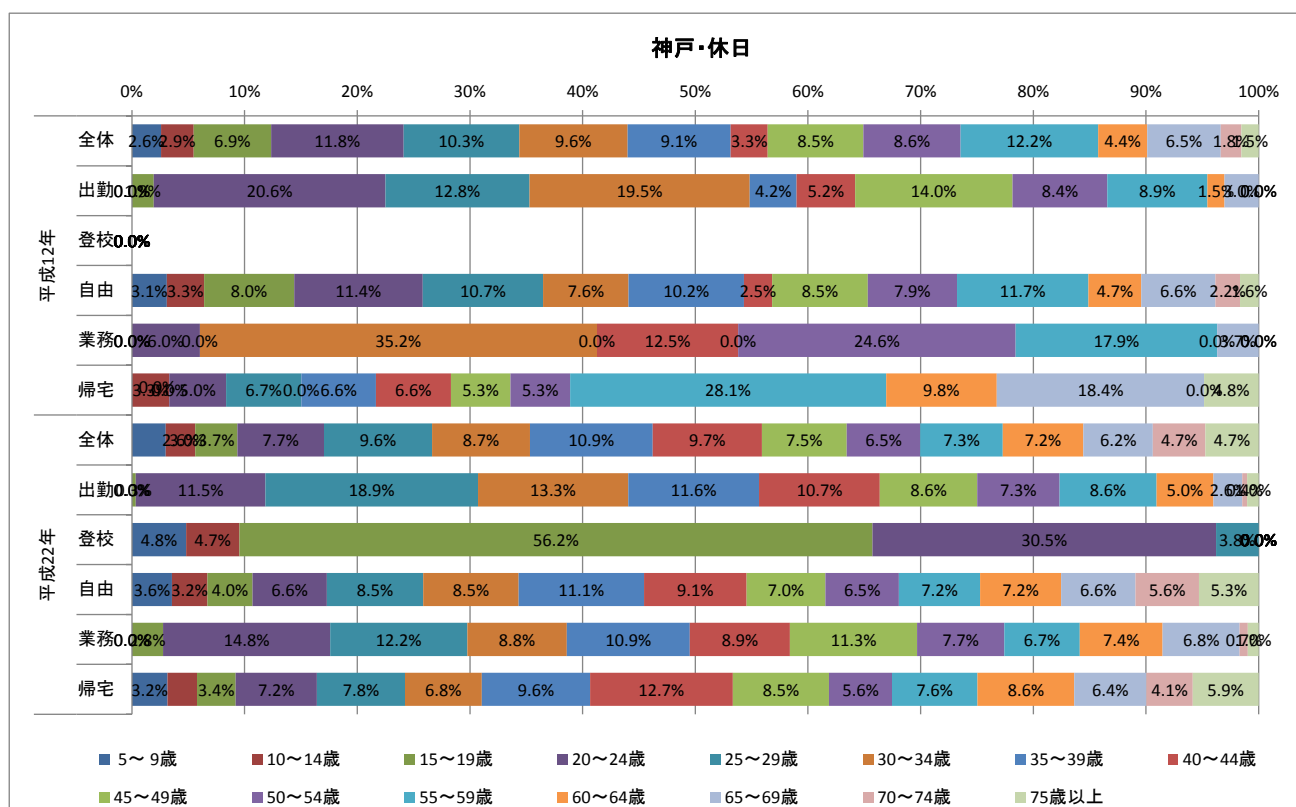
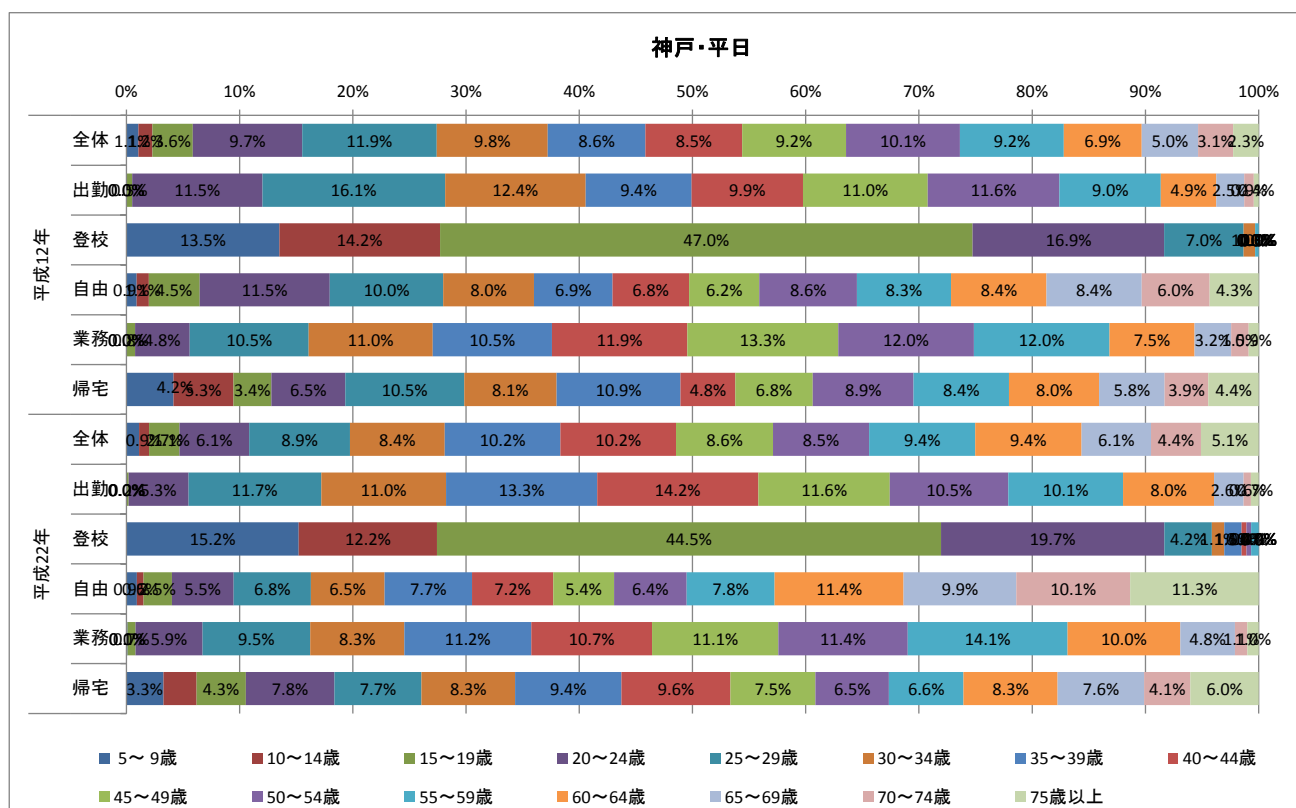
●下京区においても、世代の均等化がやや見受けられる

- 平成 12～平成 22 年度における、目的別・年齢階層別の集中量の推移を他エリアと比較すると、下京区においても中京区と同様、休日の「自由」等で世代の均等化の傾向がやや見受けられる。

◆目的別・年齢階層別集中量の構成比（平成 12～22 年度推移 他エリア比較）







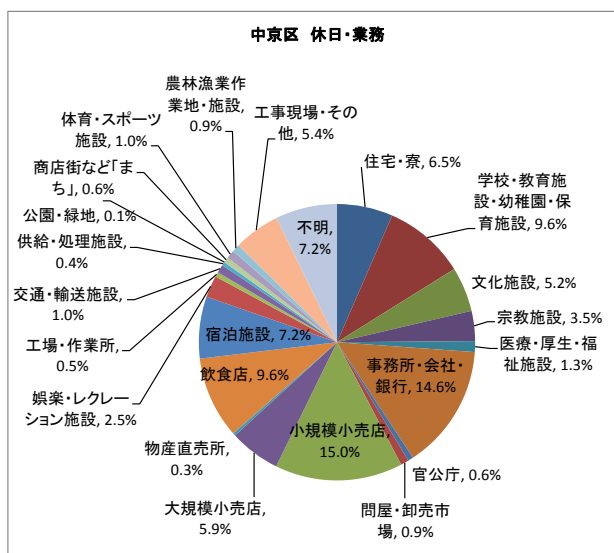
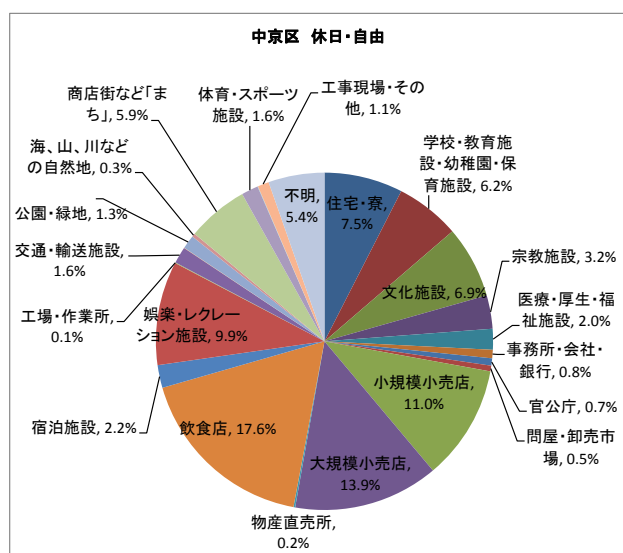
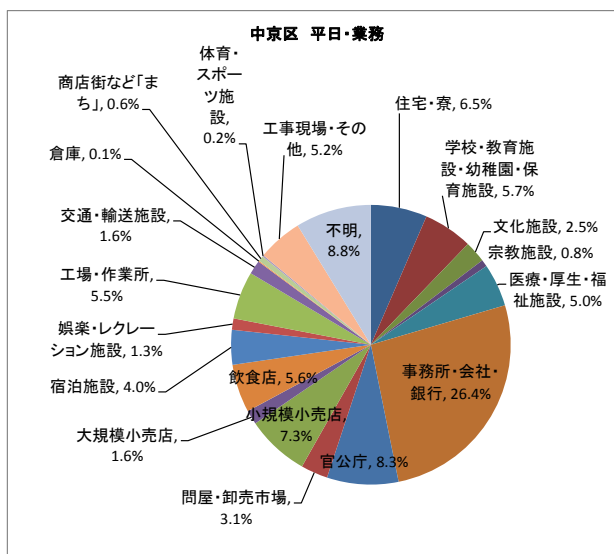
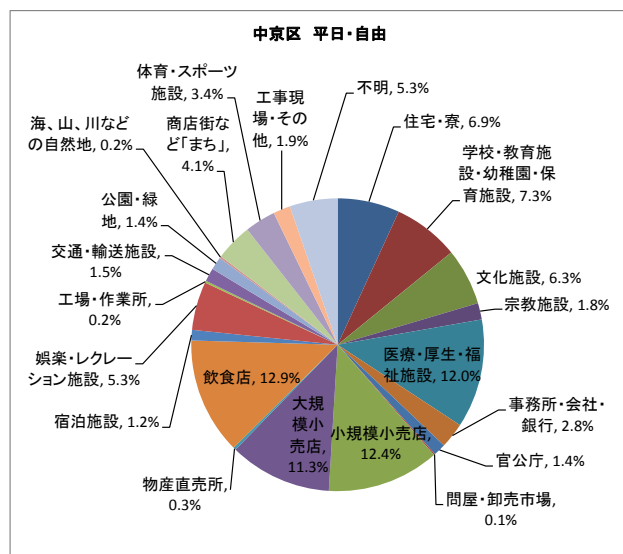
(平成 12～22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

⑤目的別・到着施設別集中量

●「自由」目的で訪れる人は「飲食店」「小規模小売店」「大規模小売店」と主に来訪

- ・ 平成 22 年度の中京区の集中量における、目的別・最終到着施設別の構成比をみると、「自由」では、平日・休日ともに「飲食店」、「小規模小売店」、「大規模小売店」、「文化施設」のポイントが高い。
- ・ また、平日では「医療・厚生・福祉施設」のポイントが高くなっている。
- ・ 「業務」では、「事務所・会社・銀行」、「小規模小売店」、「飲食店」、「学校・教育施設・幼稚園・保育施設」が平日・休日ともに高い。また、平日では「官公庁」、休日では「大規模小売店」、「宿泊施設」のポイントが高くなっている。

◆目的別・到着施設別集中量の構成比



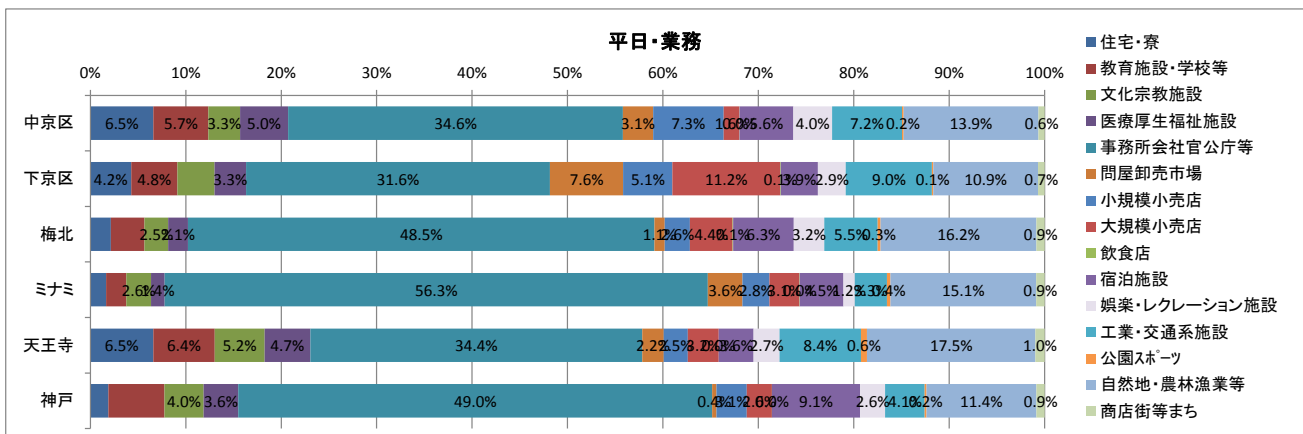
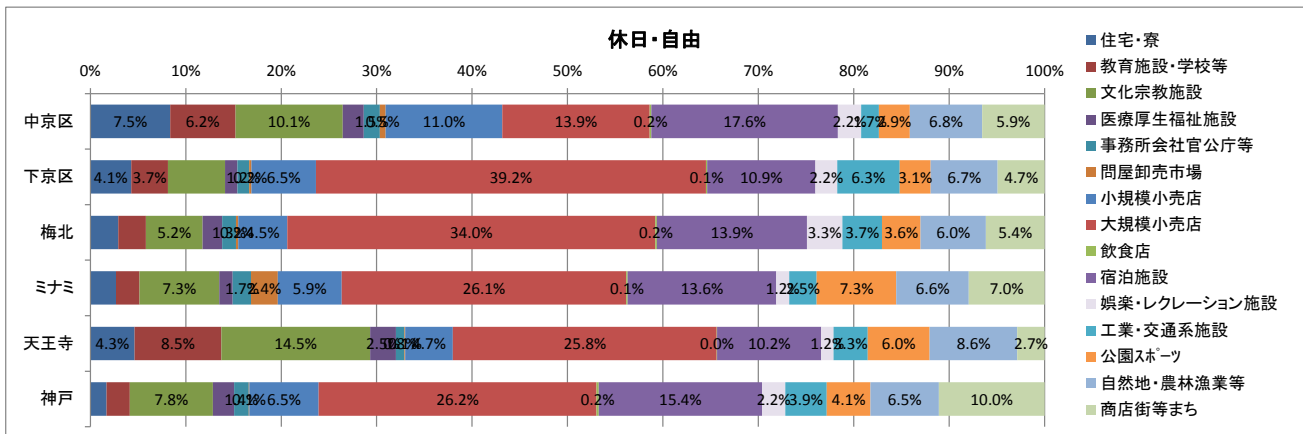
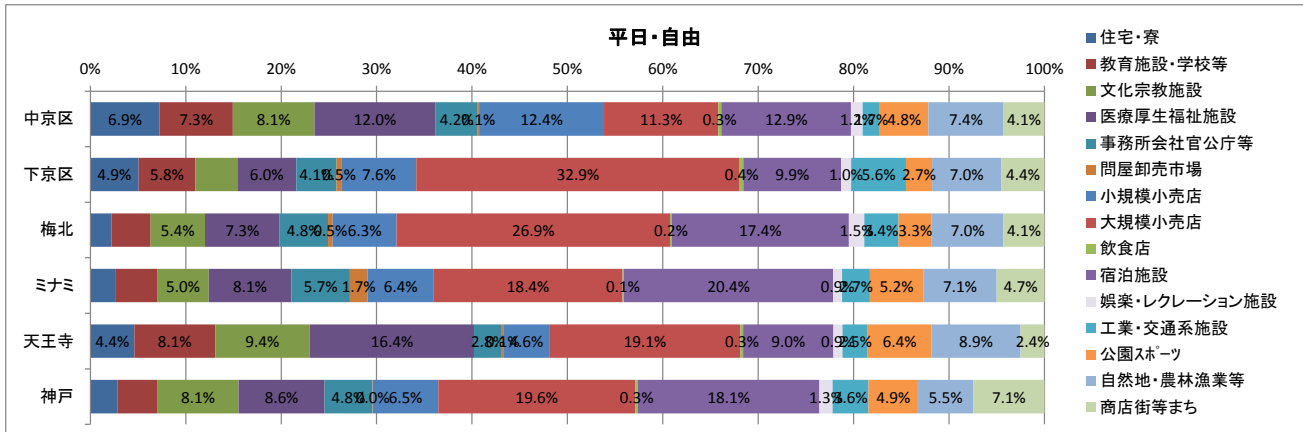
※最終到着施設別集計は、目的「自由」、「業務」のみ

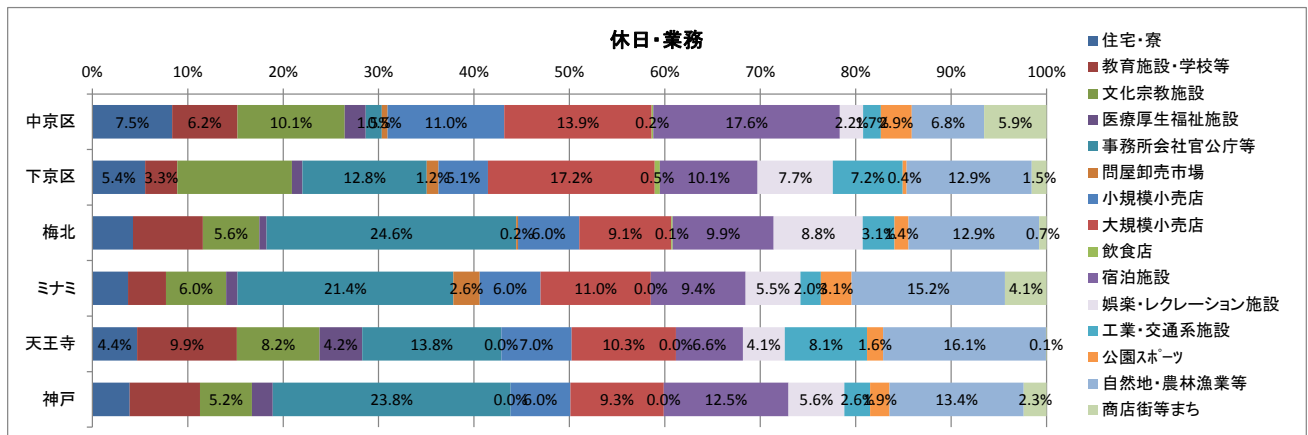
(平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

- 近畿圏の他エリアに比べ、平日・休日ともに「小規模小売店」を目指して訪れる人が多い
- 近畿圏の他エリアに比べ、到着施設の構成比は均等の傾向にあり、多様な目的の来街が多い

- ・平成 22 年度における、目的別・最終到着施設別の中京区の集中量を、他エリアと比較すると、「自由」では、平日・休日ともに「大規模小売店」のポイントが低く、「小規模小売店」のポイントが高くなっている。また、各項目間でのポイントの差が少なく、多様な目的の来街が多いと言える。
- ・「業務」では、「事務所・会社・銀行」のポイントが低く、「小規模小売店」のポイントが高い。

◆目的別・到着施設別集中量の構成比（他エリア比較）



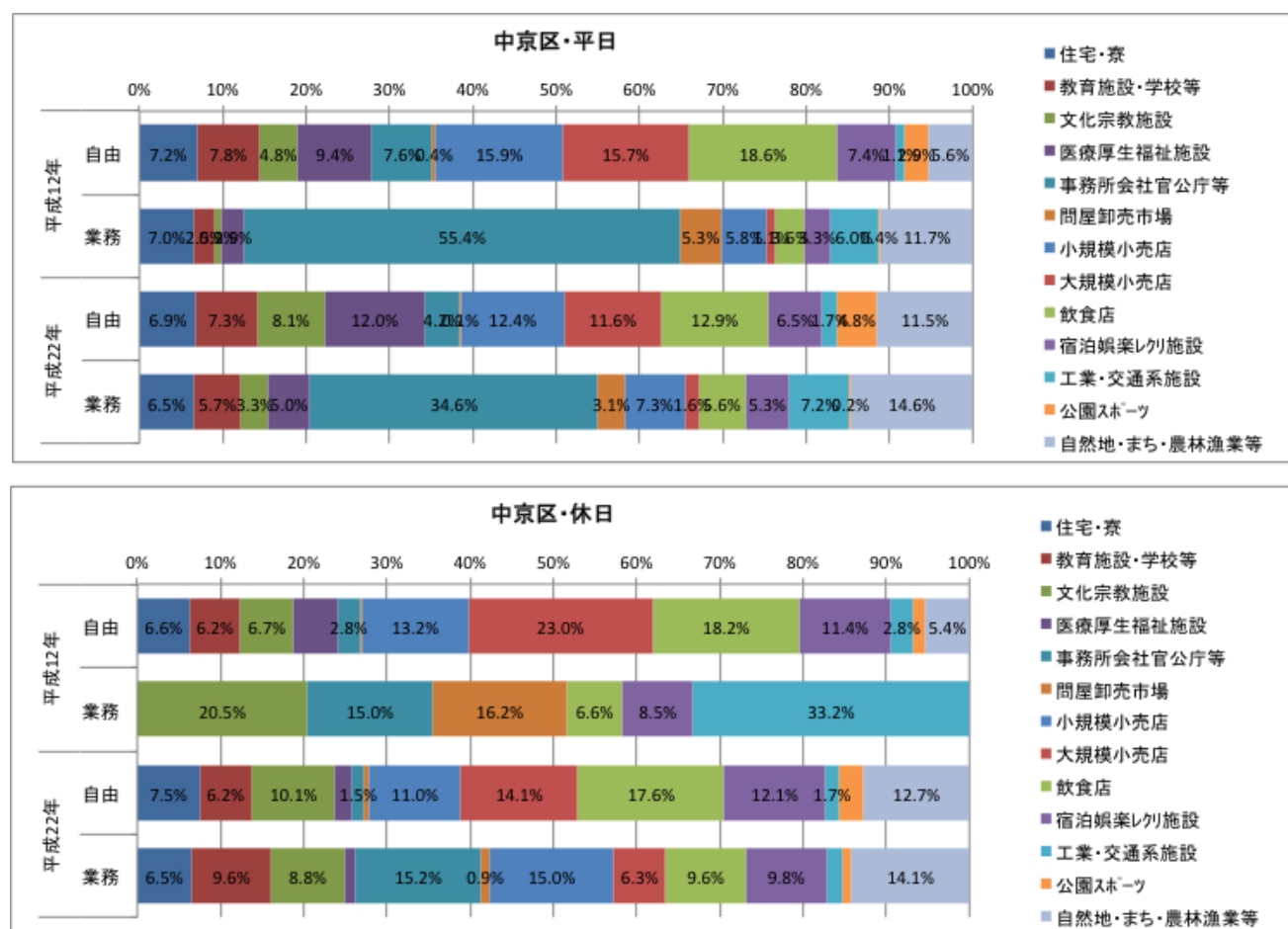


(平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)

●平日・休日ともに「自由」目的における「商業系施設（小規模・大規模小売店・飲食店）」を目指した来街は減少傾向にあるが、休日の「小規模小売店」「飲食店」は横ばいと健闘

- 平成 12～22 年度における、目的別・最終到着施設別の中京区の集中量の推移をみると、平日の「自由」目的における「小規模小売店」、「大規模小売店」、「飲食店」の構成比が減少と、商業系施設の全ての構成比が減少している。「自然地・まち・農林漁業等」が増加しているが、この項目には「商店街等まち」も半数程度含まれており、まちの散策等を目的とした来街が増加しているモノと推察される。
- また、「業務」目的では、「事務所・会社・銀行」の構成比が約 20 ポイントと大幅に減少し、その他の項目が全体に構成比を増加する傾向となっている。
- 休日においては、「自由」目的における商業系施設の構成比は全て減少しているが、平日と比べると「小規模小売店」、「飲食店」は 1～2 ポイントの減少と微減であり、ほぼ横ばいに推移している。「自然地・まち・農林漁業等」の増加傾向も平日と同様見受けられる。

◆目的別・到着施設別集中量の構成比（平成 12～22 年度推移）

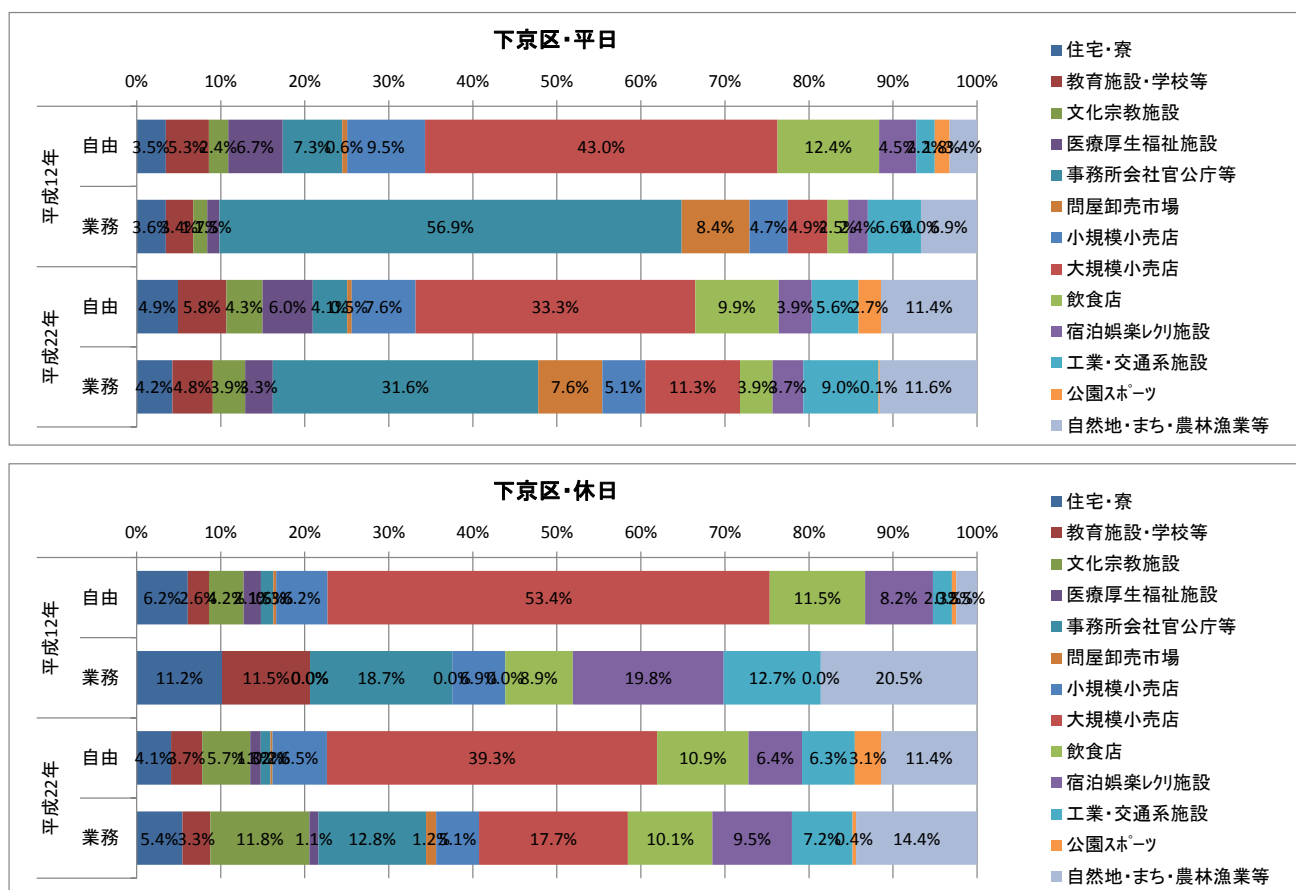


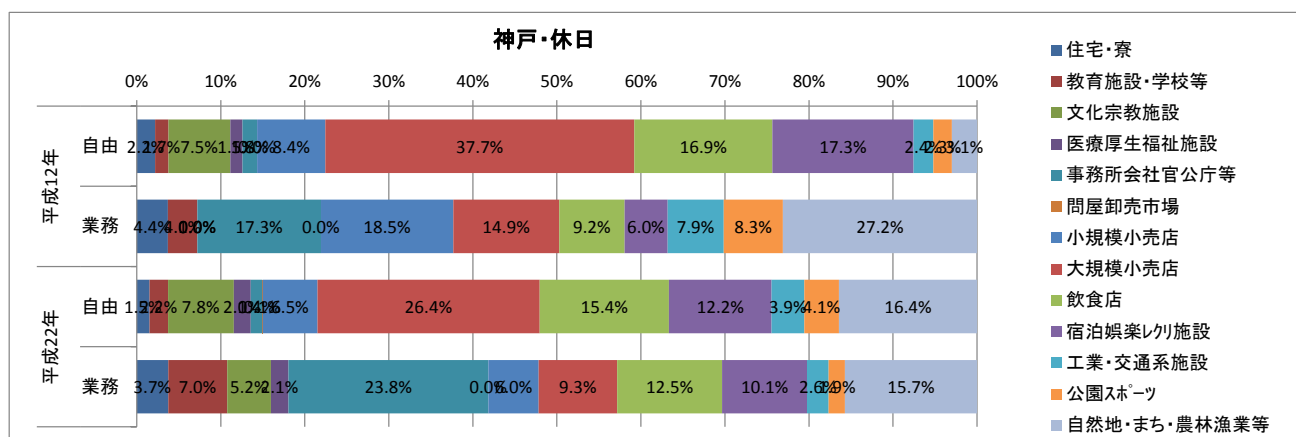
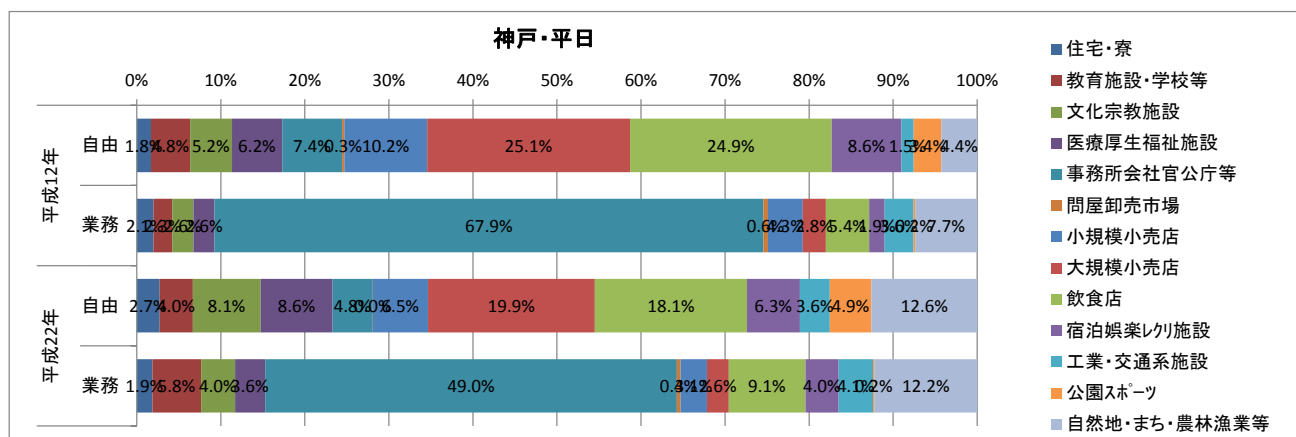
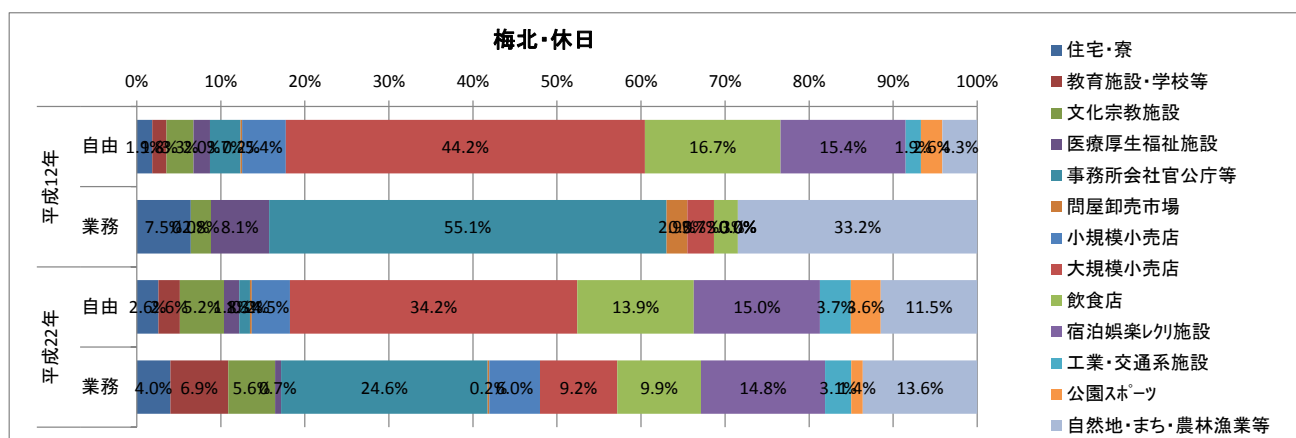
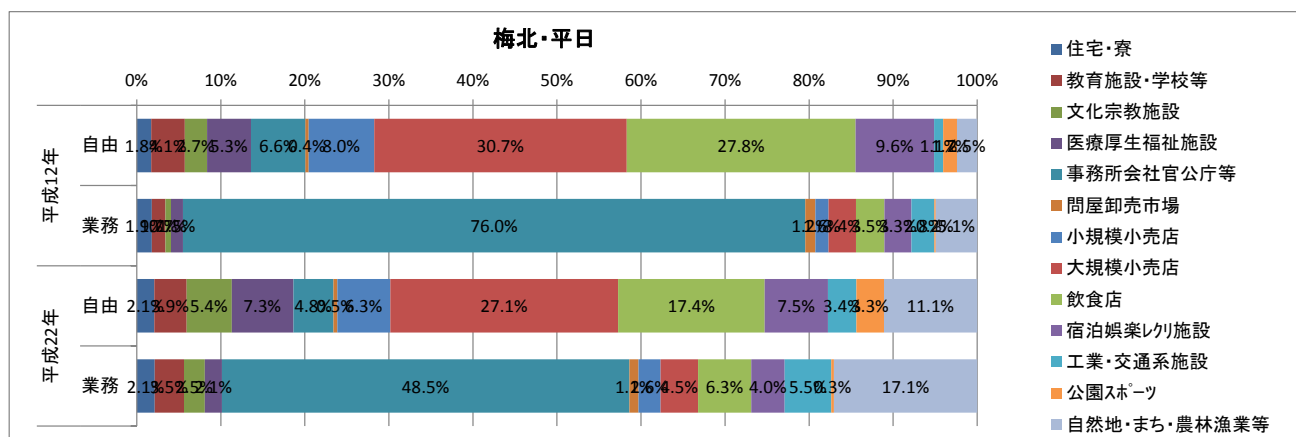
（平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査）

●平日の「業務」目的における事業系施設の構成比が他エリアでも減少、休日の「大規模小売店」の構成比が減少し、その他の施設が少しずつ構成比を伸ばす傾向

- ・平成12～22年度における、目的別・最終到着施設別の他エリアの集中量の推移をみると、下京区の平日では「自由」において「大規模小売店」が減少し、「文化宗教施設」、「自然地・まち・農林漁業等」がやや増加している。また、「業務」において「事務所・会社・官公庁等」が減少し、「大規模小売店」や「工業・交通系施設」等が増加傾向にある。休日では「自由」における「大規模小売店」が減少し、「文化宗教施設」、「自然地・まち・農林漁業等」がやや増加している。
- ・梅北・神戸についてはともに平日の「業務」における「事務所・会社・官公庁等」が減少しており、休日の「大型小売店舗」が減少してその他の施設がやや増加する傾向がみられる。

◆目的別・到着施設別集中量の構成比（平成12～22年度推移 他エリア比較）





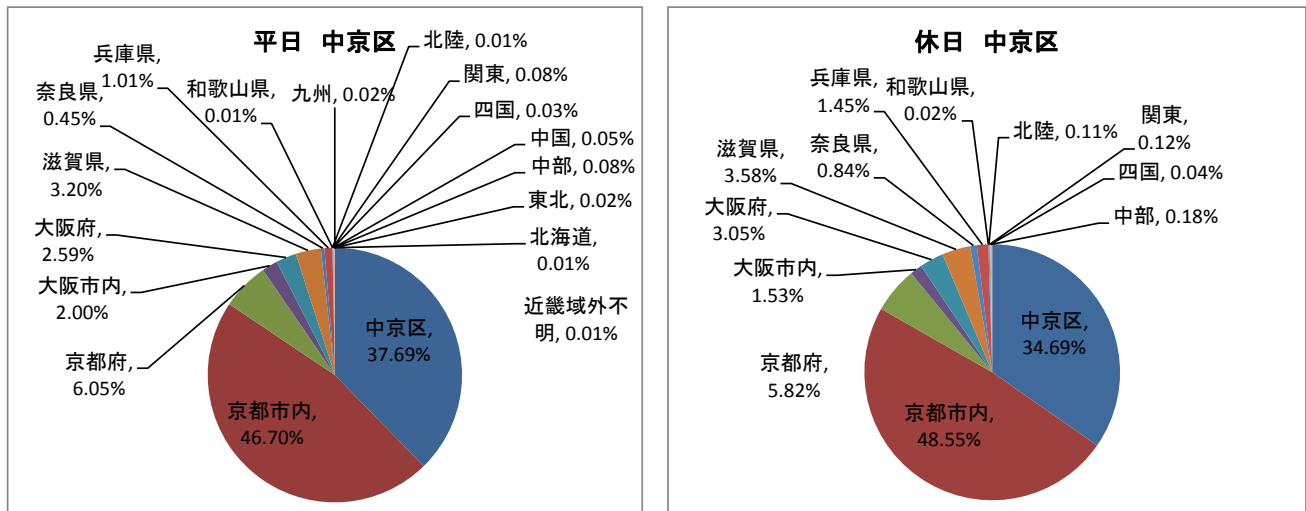
(3) 流動量

①目的別・主要交通手段別流動量

●中京区を訪れる人の約 80%が京都市内を訪れており、遠方からの来街は 20%程度にとどまる

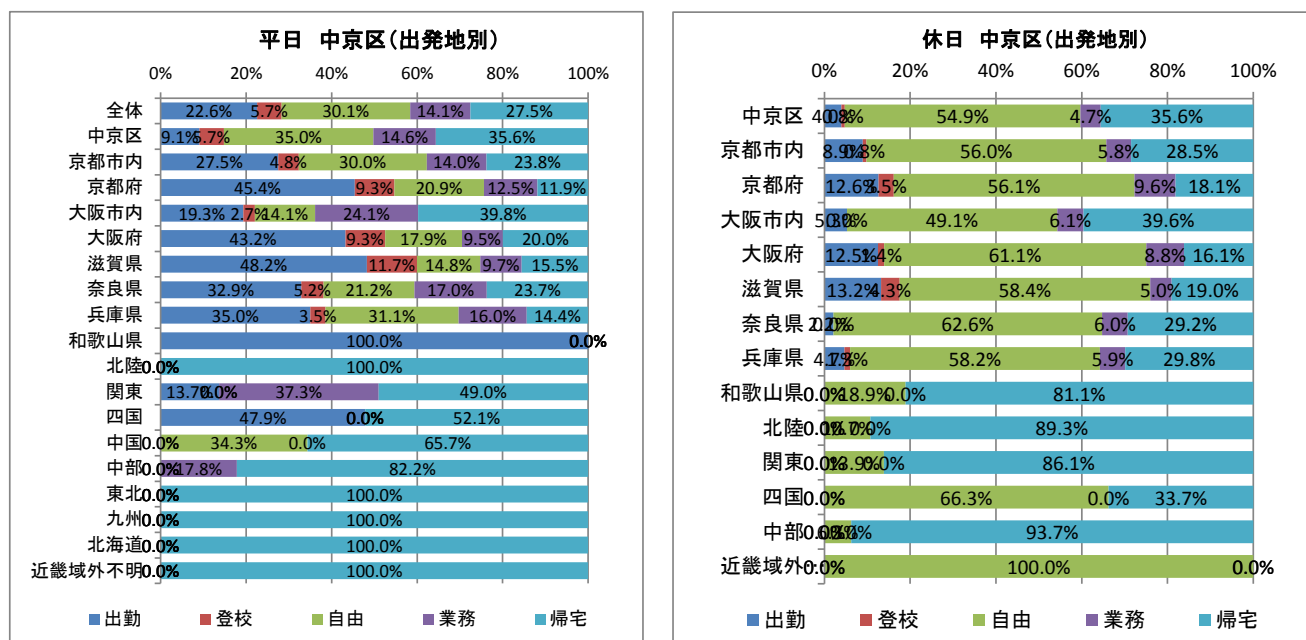
- 平成 22 年度の中京区の流動量における、出発地別の構成比をみると、平日・休日ともに「中京区」が 30～40%、中京区以外の「京都市内」は 50%弱、京都市以外の「京都府」が約 6%となっている。

◆出発地別流動量の構成比



- 平成 22 年度の中京区の流動量の、出発地別・目的別の構成比をみると、平日では、出発地が「中京区」、「京都市内」で「自由」の構成比が高くなっており、「京都府」、「大阪府」、「滋賀県」等で「出勤」の構成比が高くなっている。休日では、「大阪市内」、「大阪府」、「滋賀県」、「奈良県」、「兵庫県」において、平日に比べて「自由」が高い構成比となっている。

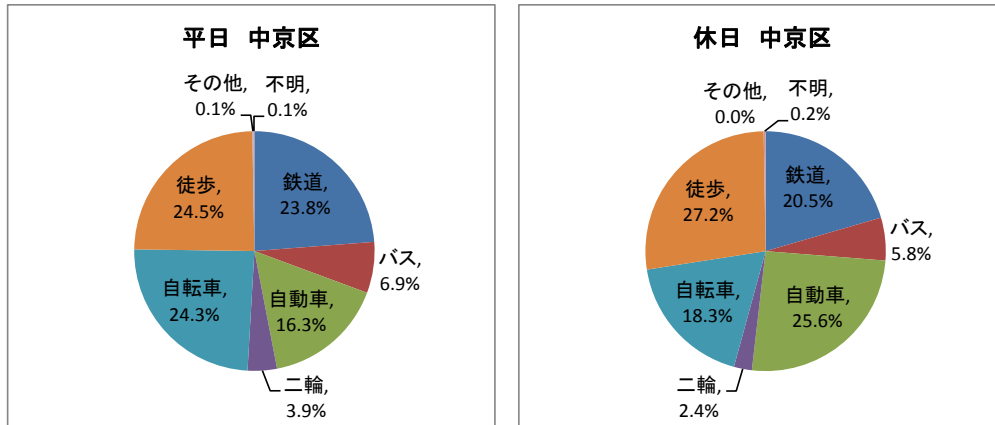
◆出発地別・目的別流動量の構成比



●来街交通手段は、鉄道・自動車・自転車・徒歩が同程度、休日では若干自動車の割合が増える

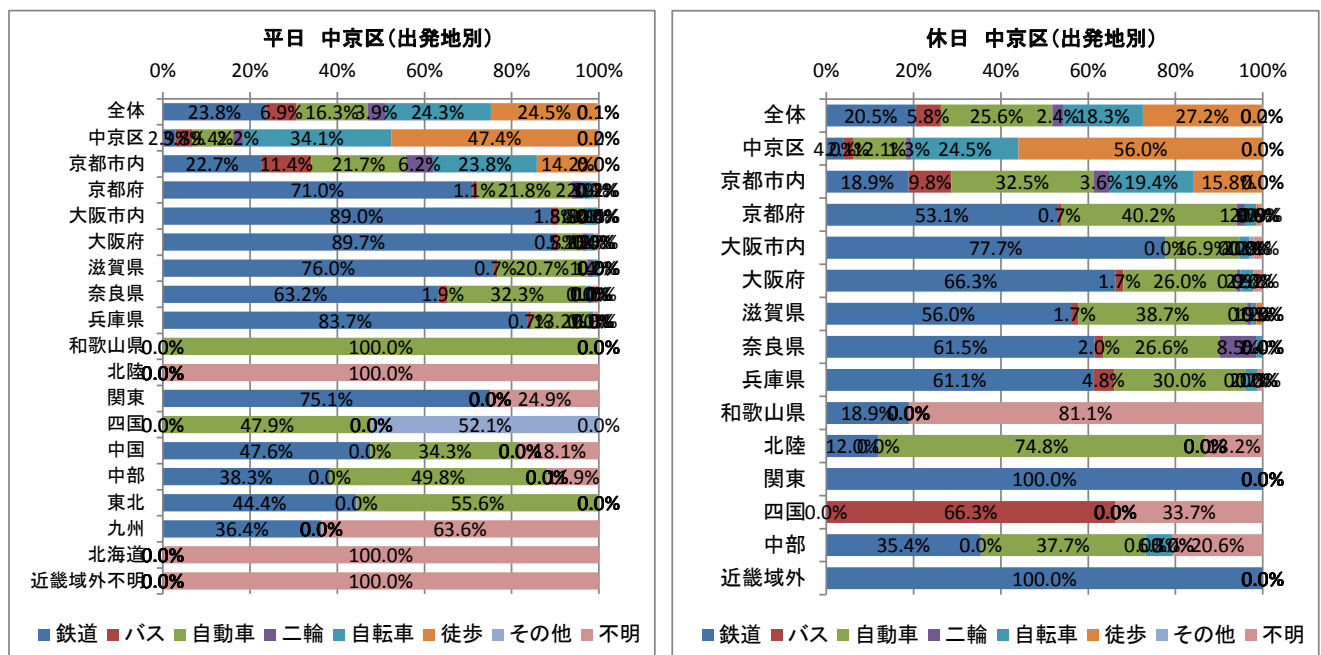
- 平成 22 年度の中京区の流動量における、主要交通手段別の構成比をみると、鉄道・自動車・自転車・徒歩が同程度のポイントとなっている。
- 平日では休日に比べて、特に自転車のポイントが高くなっている。休日では平日に比べて、特に自動車のポイントが高くなっている。

◆主要交通手段別流動量の構成比



- 平成 22 年度の中京区の流動量における、出発地別・主要交通手段別の構成比をみると、出発地が「中京区」では徒歩、自転車が多くの割合を占めており、「京都市内」では自転車、自動車、鉄道が多くの割合を占める。
- 出発地が「中京区」では、平日に比べて休日の徒歩のポイントが多く、また自転車のポイントが少なくなっている。
- 出発地が「京都府」、「大阪市内」、「大阪府」、「滋賀県」、「奈良県」、「兵庫県」等では鉄道のポイントが多くを占めている。

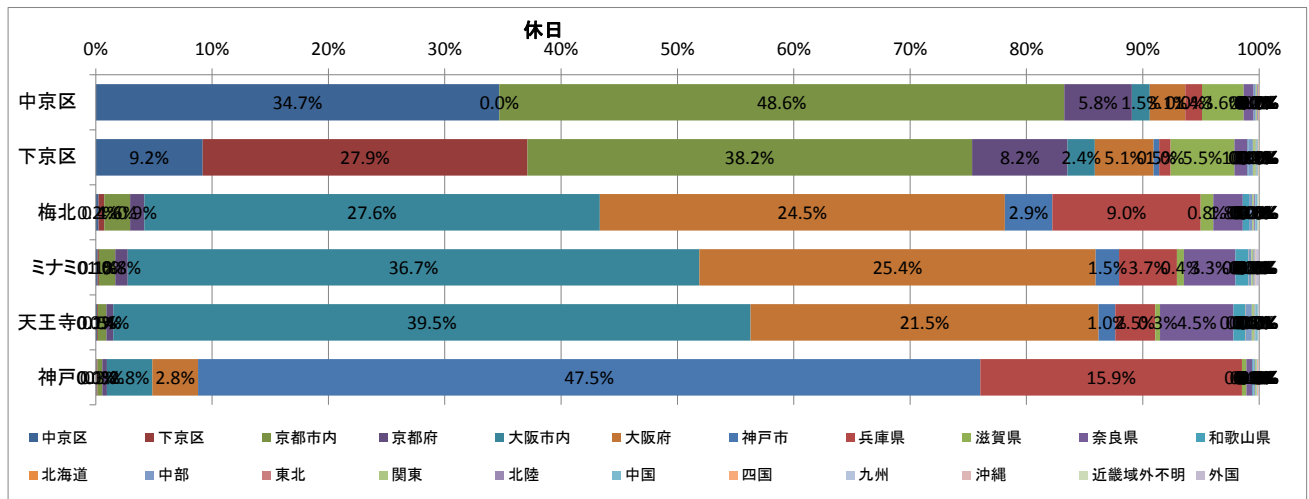
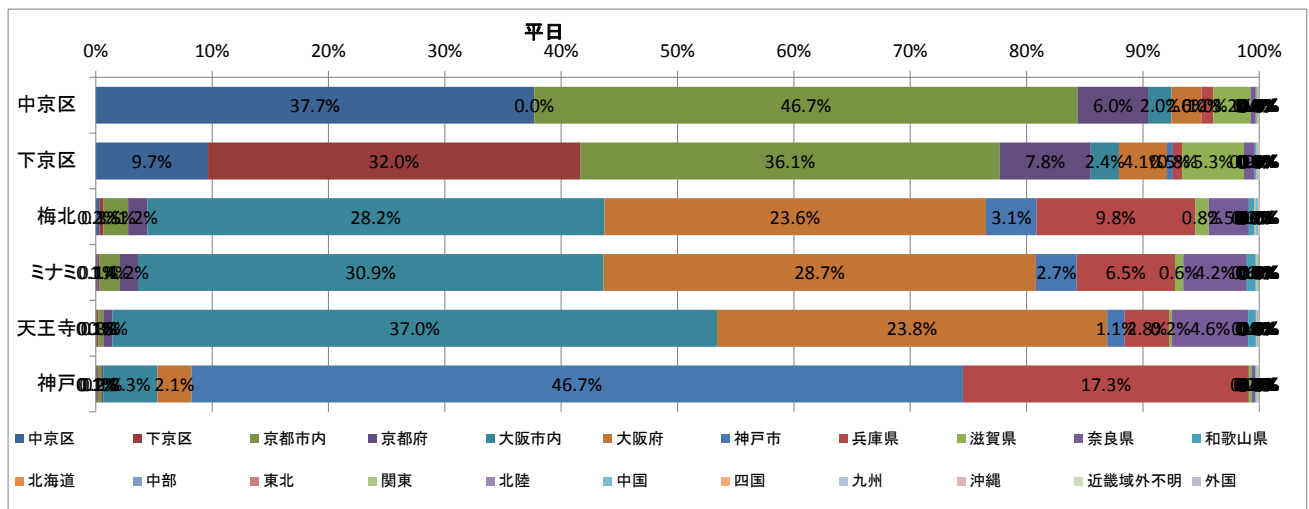
◆出発地別・主要交通手段別流動量の構成比



●他エリアと比べても、エリア内及び周辺住民による来街割合が高い

- ・平成 22 年度の流動量における出発地別の構成比を他エリアと比較すると、中京区は特に市内（梅北の場合だと大阪市内、神戸の場合だと神戸市）からの来街が 80%以上を占めており、エリア内及び周辺住民による来街が多い。
- ・梅北、ミナミ等については、流動量における市内の割合が他エリアに比べて低く、より広域からの来街が多い。

◆出発地別流動量の構成比（他エリア比較）



(平成 22 年度 京阪神圏パーソントリップ調査)